『古代アメリカ』18, 2015, pp.1-40

＜論文＞

ワルパとナスカ

―ワンカ・ハサ遺跡出土土器から見た地域間交流の様相―

土井正樹
（日本学術振興会特別研究員 PD、山形大学客員研究員）

【要旨】

現在のペルーを中心とする中央アンデス地域の編年上、前期中間期と呼ばれる時期には、ペルー中央高地南部のアヤクーチョ谷ではワルパ、ペルー南海岸のイカ川とリオ・グランデ・デ・ナスカ川の流域を中心とする地域にはナスカと呼ばれる社会が存在していた。本論では、アヤクーチョ谷のワンカ・ハサ遺跡の土器資料に基づき、ワルパとナスカとの交流について論じる。ワルパとナスカの交流は、中央アンデス地域初の広域国家であるワリの成立に大きく関わると考えられるが、その実態解明は進んでいない。

本論ではワルパとナスカの交流の様子を明らかにする必要性について述べたのち、先行研究を概観し、ワルパとナスカの交流に関するこれまでの研究の問題点を指摘する。次に、ワンカ・ハサ遺跡から出土した一括土器を概観し、それらが中期ホライズンの土器の混在しない、ワルパ文化のものであることを示す。続いてワンカ・ハサ遺跡の一括土器の図像と器形をナスカ文化の土器と比較し、それらの図像や器形がナスカ文化からワルパ文化へと伝わった可能性を明らかにする。さらに、本論で提示した資料とそれまでの議論の結果に基づき、ワルパとナスカの交流が活発化した時期が前期中間期の比較的遅い時期である可能性について論じ、その後、前期中間期後期以降、次第に顕著化するナスカ地域での低地から高地へという人々の移動がワルパとナスカの密接な交流を生み出したのではないかという仮説を提示する。最後に、本論における議論をまとめ、今後の課題について述べる。

【キーワード】

前期中間期、中期ホライズン、地域間交流、土器、ワルパ、ナスカ、ワンカ・ハサ遺跡

【目次】

1. はじめに
2. 先行研究
3. ワンカ・ハサ遺跡
4. 第 2 建築フェイズ床面検出土器
5. ワンカ・ハサ遺跡出土資料とナスカ文化の土器の比較
6. ワルパとナスカ

7. おわりに

１．はじめに

現在のペルーを中心とする中央アンデス地域の編年において前期中間期（表 1）と呼ばれる時代には、地域毎に個性的な社会が繁栄していた。この時期ペルー南海岸のイカ川とリオ・グランデ・デ・ナスカ川流域を中心とする地域 (註 1) に存在した社会はナスカ、ペルー中央高地南部のアヤクーチョ谷に存在した社会はワルパと呼ばれている (註 2)。ナスカを特徴付ける遺物や遺構はナスカ文化と呼ばれ、その代表として世界遺産に登録されている地上絵をはじめ、多彩色で自然および超自然的モチーフを表現した土器や織物、そして大規模建造物によって構成される祭祀センターであるカワチ遺跡を挙げることができる。明確な社会階層の存在を示す証拠が乏しいことから、一般には、ナスカは国家レベルには達していない社会であったと考えられている［Schreiber and Lancho Rojas 2003:14-17; Silverman and Proulx 2002; Vaughn 2009］ (註3)。

ワルパに関しては調査が乏しく、特徴的な土器が知られているのみで、社会的な側面に関してはほとんど明らかになっていない。ワルパ文化の典型的な土器は、白地に黒で縦線、横線、波状文、市松文などの幾何学文が表現されたものであり、ナスカの土器と比較すると、色使い、図像、器形、仕上げの全ての面において素朴である。また、建築としては、円形および不定形の住居や、山の斜面に石造の土留壁を設けることによって築かれた段々畑の存在が知られているが、大規模な建造物や祭祀施設は見つかっていない。埋葬においても社会階層の存在を示唆する副葬品の顕著な違いなどは報告されていない。さらに、社会の中心と考えられるような大規模集落や祭祀センターの存在も確認されていない。したがって、ワルパはナスカと同様に国家レベルに達していない社会であったと考えられ、同時にワルパでは、その存在時期の大半を通じて、工芸品製作においてナスカほどの技術的な発達や社会の複雑化がみられなかったと推測される。

次の中期ホライズンの時期になるとアヤクーチョ谷と南海岸との間の社会-文化的関係は一変する。ワルパの後にアヤクーチョ谷に出現したワリ (註 4) は、一般に国家として認識されている。ワリに関連する土器や建築はアヤクーチョ谷を越えて、現在のペルー領域を中心とする中央アンデス地域の広い範囲に分布している (図 1)。その一方で、中期ホライズンに入るとナスカは衰退し、やがてワリの勢力下に入った、もしくはワリによって征服されたと考えられている。

中央アンデス地域におけるワリ以前の社会の広がりは河谷や盆地を単位としており、地理的な広がりおよびそこに含まれる生態学的多様性は比較的限られていた。しかし、ワリ文化に関連する建築や土器が分布する地理的範囲には、現在のペルー領の山岳部および海岸部のほぼ全域が含まれ、生態学的にも多様性に富んだ地域が含まれている。そのため、ワリの成立は中央アンデスにおける初の広域国家の出現ととらえることができ、新しい社会体制の出現を示している可能性がある。ワリが成立した要因として、かつてはティティカカ湖畔に存在したティワナク文化（図 1）からの宗教的要素の伝播が重視されていた［Menzel 1964］。しかし最近では、新たな発掘資料が蓄積され、それらの資料に基づく土器編年研究の進展により、ティワナク文化からの宗教的要素の伝播を示すと考えられていた図像が描かれた土器が現れるのは、ワリ成立後であると考えられるようになってきている［Knobloch 1983:310-312, 315; Isbell and Cook 2002:276］。その一方で、次第にワルパからワリへの連続的変化が明らかとなり［土井 2010; Isbell and Cook 2002; Leoni 2009］、同時に、ワリの成立に先立ちワルパとナスカとの交流が活発化した可能性が明らかになってきた［土井 2011; Knobloch 2005, 2013］。このことは、

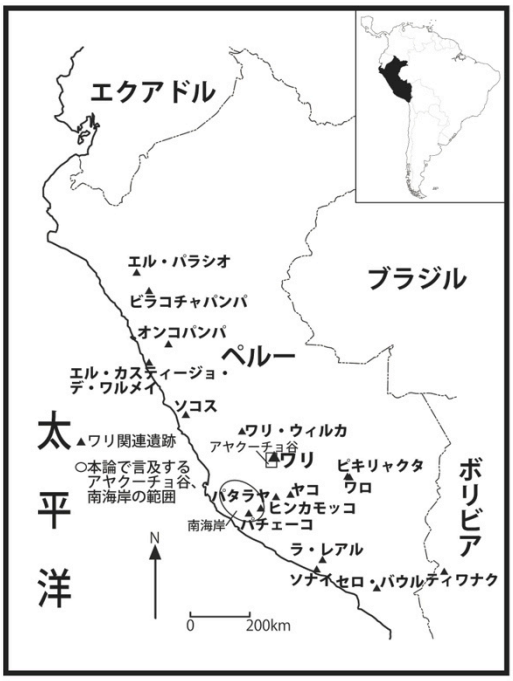

図 1 ワリ関連遺跡

図 2 アヤクーチョ谷とワンカ・ハサ遺跡

ワリの成立にワルパとナスカの交流が大きく関わっている可能性を示している。とくにワルパに関する研究が乏しい現状では、ワルパ関連遺跡の発掘調査を行い、その出土資料とナスカに関する考古資料を比較することにより、ワルパとナスカの関係を解明することがワリ成立過程の理解のために急務となっている。

筆者はワリ国家の成立過程を明らかにするために、2002 年と 2003 年にアヤクーチョ谷のトリゴパンパ村周辺に存在する 3 遺跡において発掘調査を行った（図 2, 図 3）。その結果、3 遺跡のうちの 1 つであるワンカ・ハサ遺跡から、ナスカとの関係を示すワルパの土器が出土した。さらに、それらの資料の中には、同時に埋められたと考えられる一括資料が含まれていた。本論の目的は、この一括資料を利用することにより、ワルパとナスカの間で、いつ、どのような交流が存在したのかを明らかにすることである。

本論では、以下のように議論を進める。まず次章では、編年とワルパとナスカの社会的関係に関する先行研究を概観する。編年については、ワルパ文化とナスカ文化の間の編年上の問題を、相対年代及び数値年代に分けて考察し、本論では、扱うことのできる資料の制約から、相対年代に基づく議論を行うことを述べる。また、ワルパとナスカの社会的関係については、先行研究では、考古資料に認められる変化がワルパのナスカへの進出によって生じたという考えが存在することを指摘する。

ワルパとナスカの交流が生じた時期の相対編年上の位置づけや、両者間の交流のあり方を解明するための手がかりとなるのは、ワンカ・ハサ遺跡から一括で出土した土器と土製品である。第 3 章で、発掘調査の概要について説明し、第 4 章で、ワンカ・ハサ遺跡の一括土器 (註5) の出土状況とそれらの様式的特徴について説明する。

次の第 5 章では、ワンカ・ハサ遺跡から出土した一括土器に基づき、ワルパとナスカの間で、土器の装飾や器形の共通点を検討し、土器に関する情報がナスカからワルパへと伝わった可能性を明らかにする。土器に関

する情報の伝わり方は、ワルパとナスカの交流のあり方を考えるうえでの基礎となるものであるが、先行研究では、ワルパ文化とナスカ文化の土器における類似性は「関係」や「影響」［Lumbreras 1974:95; Menzel 1964:8-10; Pérez 2012:165］という言葉で指摘されるにとどまっている。これまで、装飾要素と器形においてワルパ文化の土器とナスカ文化の土器との間でどのような類似性が認められるか、そして類似する要素の起源がワルパ文化とナスカ文化のどちらにあるのかを具体的に示した研究はほとんど存在しない。本論では、ワルパ文化とナスカ文化の土器の類似点と、そのような類似性を示す要素の起源について具体的な検討を行う。

当然のことながらワルパはナスカ以外の社会とも接触や交流があったと考えられ、それらの社会で使用されていた土器とワルパの土器との間にも類似性や共通性が認められる可能性は否定できない。しかしながら本論の目的は、ワルパの土器に認められる諸特徴の起源およびそれらの諸特徴と他の社会の土器との関係全体を明らかにすることではなく、あくまでもワルパとナスカの交流の様態についての手がかりを得ることである。そのため、第 5 章での検討の対象とするのは、ワルパ、すなわちワンカ・ハサ遺跡の資料と、ナスカの土器に限定する。

第 6 章では、第 5 章で明らかになったナスカからワルパへという土器情報の伝達がいつ、どのようにして生じたのかを論じる。まず、ワンカ・ハサ遺跡の資料とナスカ 8 様式との関連性を指摘し、ワルパとナスカの交流が活発化したのはアヤクーチョ谷においてはクルス・パタ様式が、南海岸においてはナスカ 8 様式が製作・使用されていた時期であると考えられることを論じる。さらに、ワンカ・ハサ遺跡の一括土器に認められる図像や器形の由来という観点から、ナスカ文化の研究者たちが中期ホライズンに位置づけているナスカ 8 様式の前半が前期中間期に属し、前期中間期の比較的遅い時期に、土器の図像と器形がナスカ 8 様式からクルス・パタ様式へと伝わった可能性について論じる。

次に、ナスカからワルパへと土器の情報が伝わったとするならば、その背景としてどのような状況が存在したのか考察する。土器に関する情報の伝わり方の背景を明らかにするためには、交易、移民、政治的進出などの人の動きに加え、当該社会における土器情報の受け入れ方も考慮する必要がある。ただし、研究対象とする時期に使用されていたモノのごく一部が考古資料として存在しているに過ぎないという考古資料自体が有する制約に加え、とくにワルパに関する資料が乏しい現状においては、経済的、政治的、あるいは環境変動などによる人の動きや、ナスカとワルパの土器情報の受け入れに対する態度を明らかにするには、今後の長期的かつ戦略的な調査・研究が必要である。本論は、そのような研究を進めるための第 1 歩であり、現在考古学的に明らかになっている事実を説明しうるひとつの仮説を提示したい。

まず、先行研究で示されているワルパの南海岸への進出を示す根拠を検討し、その脆弱性を明らかにする。さらに、最近比較的精度の高い資料が蓄積されつつあるナスカ地域のパルパ市周辺で行われている調査の中から、低地から高地（アヤクーチョ谷方面）への人の移動を示唆する成果が現れてきている。そこで、パルパ市周辺で行われている研究の成果に注目し、ナスカからワルパへという土器情報の伝達の背景として、先行研究で示されているようなワルパの南海岸への進出によるものではなく、ナスカの人々の居住の場が低地から高地へと変化したことによって生じた可能性があることを指摘する。

最後の第 7 章では、議論のまとめを行うと共に、ワルパとナスカの交流に関する研究における今後の方向性のひとつを示したい。

議論を始めるにあたり、まずは、これまでのワルパとナスカの関係に関する議論を振り返り、先行研究における問題点を整理する。

２．先行研究

2-1. 編年

ワルパとナスカの交流を論じるにあたり、まずは両者に関連する編年を整理する必要がある。ここではまず、セリエーションと層位的関係の分析によって発展してきたアヤクーチョ谷と南海岸の相対編年を比較し、その問題点を指摘する。次に、放射性炭素年代に基づく数値年代と相対編年との関係にも言及した上で、本論での編年の扱い方を示す。

2-1. 1）相対編年

ワルパとナスカとの関係が研究者に認識されるようになったのは、編年のための土器分類の過程においてであった。ワルパ文化の土器とナスカ文化の土器との装飾における類似性をいち早く指摘したのは、アヤクーチョ谷の土器の編年的研究を進めていた Luis Lumbreras である［Lumbreras 1959:80, 1960:174］。のちに彼は、ナスカ文化の土器と類似した装飾を有するワルパ文化の土器をクルス・パタ様式と呼ぶようになった［Lumbreras 1974:94-95］。その後、複数の研究者によって、ワルパ文化の土器とナスカ文化の土器との関連性が指摘されてきたが、両者の編年上の対応関係については、依然として問題が残されている。

現在、アヤクーチョ谷と南海岸の両地域の編年の基礎となっているのは、南海岸のイカ河谷の資料を用いて作成されたマスターシークエンスと呼ばれる編年である。この編年は、John Rowe［1962］が考案し、その後彼の教え子達によって精緻化された。この Rowe らによる編年は、3 つのホライズンと呼ばれる時期と、ホライズンに挟まれた 2 つの中間期と呼ばれる時期によって構成されるのが特徴である。それらの時期のうち、前期中間期がワルパ文化とナスカ文化に関連し、中期ホライズンがワリ文化と関連している。この編年において、前期中間期に関しては、Lawrence Dawson によって［Silverman and Proulx 2002:22-23］(註6)、中期ホライズンに関しては Dorothy Menzel によって整備された［Menzel 1964］。

Dawson と Menzel の編年は、土器装飾のモチーフや表現方法が時間の経過と共に変化するという前提のもと、モチーフや装飾表現の変化の仕方に認められる連続性と断続性に基づき時期を区別するセリエーションの方法で設定されたものである［cf. Rowe 1961］。ナスカ文化の土器に対しては、時期名とそれに対応する土器の様式名として古い順に 1 から 9 の数字が割り当てられ、一般的にそのうちのナスカ 9 様式を除いたものが、前期中間期に属するとされている［Menzel 1964:Plate 1, 1977:89; Isbell 2001:fig.1］（表 1）。ただし、後述するように現在では、ナスカ 8 様式は南海岸の編年において中期ホライズンに位置づけられるようになっている［Isla 2001; Schreiber 2001; Silverman 1988］。前期中間期のアヤクーチョ谷の土器様式としては、地域独自の名称が用いられており、研究者によっても用いている土器様式名に違いが認められる。

前期中間期に続く中期ホライズンは、4 つの時期に細分され、さらに前半の 2 時期は、前半の A と後半の B に分けられている［Menzel 1964:Plate 1, 1977:88-chronological table］（表 1）。中期ホライズンの場合は、各時期に対応する土器様式名は、地域に応じて固有の名称が用いられている。現在のアヤクーチョ谷及び南海岸のほとんどの研究者は、このマスターシークエンスを修正しつつ用いている。Menzel によるマスターシークエンスと各地域の相対編年との関係をまとめたものが表 1 である。

この相対編年において、先述した Lumbreras は、クルス・パタ様式の装飾が、南海岸の土器編年におけるナスカ 7 様式と 8 様式の装飾に類似していることを指摘しているが［Lumbreras 1974:95］、最初にそのような指摘をしたのは、Dorothy Menzel である。Menzel は、クルス・パタ様式という言葉は用いずにワルパ文化の土器全体

時期区分		南海岸					アヤクーチョ谷		
		Menzel(1964:Plate 1, 1977: chronological table)		イカ河谷 (Beresford-Jones et al. 2011:fig.2, cf.Vaughn et al. 2014:fig.1)	ナスカ地域南部 (Hecht 2009; Reindel 2009)	ナスカ地域北部 (Conlee 2003; Schreiber and Lancho 2003; Vaughn 2009:Tble 3.1)	Menzel(1964:Plate 1, 1977: chronological table)	Lumbreras(1974), Gonzales Carré(1982: tabla de evolución y cronología en Ayacucho)	Isbell(2001:fig.1)
		イカ河谷	ナスカ地域						
中期ホライズン	4	ナスカ・エピゴナル	イカ・エピゴナル					ワマンガ	
	3	ソイソンゴ	ピニージャ	（不明）					
	2 B	アタルコ B	イカ・パチャカマク				ピニャーケ	ピニャーケ	ピニャーケ B
	2 A	アタルコ A						チャキパンパ	ピニャーケ A
	1 B	ナスカ 9 ロプレス・モホ	ナスカ 9		ナスカ 9（チャキパンパ）	ナスカ 9（チャキパンパ）	ロプレス・モホ チャキパンパ B	コンチョパタ	チャキパンパ B、オクロス B ロプレス・モホ、黒色装飾
	1 A	ナスカ 9		ナスカ 8,9			コンチョパタ チャキパンパ A オクロス	オクロス	コンチョパタ、チャキパンパ A オクロス A
前期中間期	8	ナスカ 8			ナスカ 8（ロロ）	ナスカ 8（ロロ）	ワルパ（ナスカの影響）	オクロス	クルス・パタ
	7	ナスカ 7		後期ナスカ（ナスカ 6,7）	後期ナスカ（ナスカ 6,7）	後期ナスカ（ナスカ 6,7）			ワルパ三色彩文
	6	ナスカ 6						クルス・パタ	ワルパ白地黒彩、ワルパ三色彩文
	5	ナスカ 5		中期ナスカ（ナスカ 5）	中期ナスカ（ナスカ 4,5）	中期ナスカ（ナスカ 5）	（不明）	ワルパ	ワルパ白地黒彩
	4	ナスカ 4							
	3	ナスカ 3		前期ナスカ（ナスカ [1],2,3,4）	前期ナスカ（ナスカ 2,3）	前期ナスカ（ナスカ 2,3,4）		クムンセンハ	（不明）
	2	ナスカ 2						カハ	
	1	ナスカ 1		初期ナスカ（ナスカ 1、オクカヘ 10）	初期ナスカ（ナスカ 1、オクカヘ 10）	原ナスカ（ナスカ 1、オクカヘ 10）			

表 1　南海岸、アヤクーチョ谷の相対編年

に対してワルパ様式という言葉を使用しているが、ワルパ様式にはアヤクーチョ谷独特の装飾要素の他にナスカ 7 様式とナスカ 8 様式の装飾的特徴が認められると述べている［Menzel 1964:9-10］。

ワルパ文化の土器に関して Lumbreras と Menzel の編年的研究をさらに進めたのが、Patricia Knobloch である。Knobloch は、ナスカの土器の要素の有無によってワルパ文化の土器を時期的に区別した［Knobloch 1983:277-289］。ワリ遺跡では 1974 年に、道路建設のための掘削によって露呈した土層断面に、ワルパ様式の土器のみを含む層位が確認された［Knobloch 1983:273-274, 2013］。この層位から出土したワルパ様式の土器には、ナスカ 7 様式とナスカ 8 様式の土器装飾の要素がほとんど認められず、この層位に関連する放射性炭素年代として 255-536AD（1 σ）［Knobloch:2013］という、一般に中期ホライズンの開始期と考えられている紀元後 550 年［Isbell 2001:fig.1; Knobloch 1983:294; Menzel 1977:chronological table］よりも古い較正年代が得られている。Knobloch は、この 1974 年にワリ遺跡から出土したワルパ様式の土器を、現在報告されているものの中では最古のワルパ様式の土器と考え、4 世紀ワルパ土器（forth century Huarpa ceramics）［Knobloch 1983:282］、もしくは初期ワルパ様式（early Huarpa style）［Knobloch 2013］と呼び、ナスカ 7 様式、8 様式との共通性が認められるクルス・パタ様式の土器よりも古いものであると考えた［Knobloch 1983:278-282, 289］。また、中期ホライズンのチャキパンパ様式は、クルス・パタ様式から直接発展したものであり、ワルパ様式白地黒彩タイプからクルス・パタ白色タイプを経て白地のチャキパンパ様式へと連続的に変化する過程を追うことができるという［Knobloch 1991:248］。Knobloch

の考えは、主に図像の変化に基づいているものの、ワルパ様式の土器と関連する放射性炭素年代や発掘資料の層位に基づく共伴関係も考慮されており、ワルパ様式がクルス・パタ様式に先行するという考えは一定の説得力をもつ。そこで本論でも、ワルパ様式とクルス・パタ様式の関係は、最初にワルパ様式が現れ、その後クルス・パタ様式が出現したと考える（表 1）。

一方、Dawson による南海岸の編年に対しては、その後、南海岸の内部を北部（イカ川流域）、中部（パルパ市周辺地域を含むリオ・グランデ・ナスカ川流域北部）、南部（リオ・グランデ・デ・ナスカ川流域南部）という 3 つの地域に分け、それぞれの地域毎に Dawson の編年を修正する試みが行われてきた。その結果、Dawson によって 1 から 7 に分類されたナスカ文化の土器様式は、出土状況において関連性が強いもの同士が、前期ナスカ、中期ナスカ、後期ナスカというより大きな編年上のグループにまとめられた。土器様式のまとめ方には地域によって若干の違いが認められる［Vaughn et al. 2014:fig. 1］（表 1）。また、ナスカ 1 様式に対応する時期は、地域によって名称が異なり、南海岸北部と中部では、初期ナスカ（Initial Nasca）、南部では原ナスカ（Proto Nasca）と呼ばれている［Vaughn et al. 2014:fig. 1 と table 1］。

本論と関連して相対年代で問題となるのは、ナスカ 8 様式とクルス・パタ様式との関係である。両者に関係のあることは南海岸とアヤクーチョ谷を対象とする研究者の双方が認めているが［Lumbreras 1974; Menzel 1964; Silverman 1988］、アヤクーチョ谷のクルス・パタ様式は前期中間期の土器様式として認識されているのに対し、南海岸のナスカ 8 様式は中期ホライズンの土器様式として位置づけられている。

Menzel［1964］は、ナスカ 7 様式と 8 様式を前期中間期に位置づけており、Knobloch［2005］も基本的には同じ立場に立っている。しかし、ナスカ文化の研究者の見解は異なる。Helaine Silverman は、放射性炭素年代とアヤクーチョ谷の土器装飾との比較から、ナスカ 8 様式は中期ホライズンに属するという立場にたつ［Silverman 1988］。また、ナスカ地域南部のナスカ川、タルガ川およびラス・トランカス川流域で一般調査を実施した Katharina Schreiber も、ナスカ 6 様式およびナスカ 7 様式の土器を伴う遺跡にワリ文化の痕跡はなく、ナスカ 8 様式の土器とワリ文化の遺物が常に共伴していることから、ナスカ 8 様式を中期ホライズンに位置づけている［Schreiber 2001:440］。さらに、パルパ市周辺で調査を行っている調査者も、住居祉において中期ホライズンのチャキパンパ様式とナスカ 8 様式との共伴関係が認められることからナスカ 8 様式を中期ホライズンに位置づけている［Isla 2001:557］。このように、アヤクーチョ谷を対象とする研究者と南海岸を対象とする研究者との間で、ナスカ 8 様式の編年上の位置づけが異なっている。

ナスカ 8 様式の編年上の位置づけに関する問題に関して、Knobloch［2005］は、ナスカ文化のサルを表現したものと考えられている図像に注目し、そのナスカ 7 期（ナスカ 7 様式に対応する時期）から中期ホライズンにかけての変化の過程を明らかにすることにより解決を試みている。とくに彼女は、ナスカ 8 様式の土器の図像の変化と、その変化をアヤクーチョ谷の中期ホライズンの土器、すなわちオクロス様式およびチャキパンパ様式の土器と比較することにより、従来のナスカ 8 様式と呼ばれてきた一群の土器の中に、ナスカ文化の図像の変化の延長上にあるものと、ナスカ文化の図像の変化の延長上から外れ、中期ホライズンの土器との共通性を示すものが存在することを明らかにした。Knobloch は、ナスカ文化の図像の変化の延長上にあるものを前期中間期に属するナスカ 8 様式、中期ホライズンの土器との共通性を示すものを中期ホライズンに属するロロ様式と呼ぶことを提案している［Knobloch 2005:118］。この Knobloch による議論は、ナスカ 8 様式の編年上の問題を解決する試みとして興味深いが、その議論は図像の変化のみに基づいているため、発掘資料に基づき、層位的にナスカ 8 様式と中期ホライズンの土器を区別できるのか、そして前期中間期のナスカ 8 様式に対応するアヤクーチョ谷の土器は存在するのか、検証する課題が残されている。

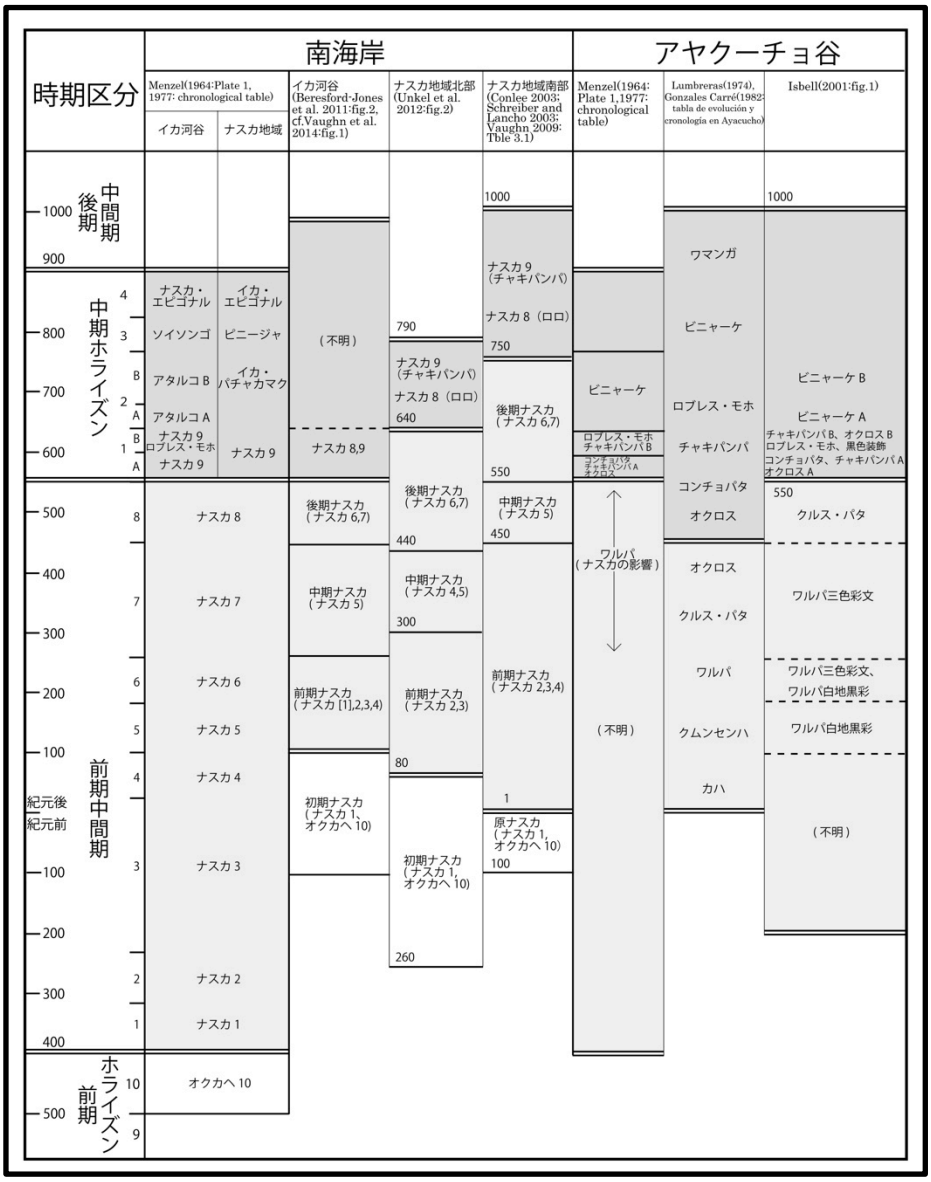

表 2　南海岸とアヤクーチョ谷の数値年代編年表

2-1. 2）数値年代

このような南海岸とアヤクーチョ谷の編年の間の齟齬は、各様式の土器に関連する放射性炭素年代によって設定されてきた数値年代に基づく編年の場合にはさらに大きくなる。現在南海岸とアヤクーチョ谷の数値年代に基づく編年をまとめたものが表 2 である。この表が示しているように、南海岸の内部においては、地域によって前期中間期と中期ホライズンの境界に対する数値年代は異なっている。また、アヤクーチョ谷では、前期中間期と中期ホライズンの境界について、研究者によって異なる年代が与えられている。

放射線炭素年代と土器様式とを関連づけることによる編年に加え、近年では、ナスカ文化の各様式の土器を

光ルミネッセンス法により直接分析することによって、その製作年代を解明することも試みられている［Vaughn et al. 2014］。その結果、時期差を示すものとして区別されてきた各様式の土器の製作時期に大きな重なりがあることが判明している［Vaughn et al. 2014:fig.3］。数値年代にもとづく土器編年の整備には、依然として多くの課題が残されているといえる。

2-1. 3）本論における編年の扱い

ワンカ・ハサ遺跡の一括土器と関連する放射性炭素年代の測定は行っていない。そのため本論では、数値年代の問題に関しては立ち入らず、相対編年に基づいて議論することにする。

これまでみてきたように、ワルパ文化とナスカ文化の土器の比較によってワルパとナスカの活発な交流が存在した時期および年代を特定するうえで、前期中間期と中期ホライズンの境界に関する問題、すなわちクルス・パタ様式とナスカ 8 様式との関係およびそれらの編年上の位置づけに関する問題が存在する。しかしながら、ナスカとワルパの活発な交流が生じていたと考えられる時期が、現在の相対編年で用いられているどの土器様式に対応しているのかという点を明らかにすることは可能である。また、後の議論で示すように、土器の図像や器形に関する情報の伝わり方を考慮することによって、ナスカとワルパの交流が活発化した時期が、相対編年上のどこに位置づけられるのかをある程度予想することも可能である。

そこで本論では、ワルパとナスカの活発な交流があった可能性がある時期に対応する土器が、アヤクーチョ谷と南海岸でそれぞれどの土器様式に相当するのかを明らかにし、また、土器に関する情報の伝わり方という観点から、ワルパとナスカの交流が活発化した時期の編年的位置づけに関しても一つの見通しを示したい。

本章の冒頭で述べたように、最初にワルパとナスカの関係が認識されるようになったのは、土器の編年的研究においてであった。しかしその後、ワルパとナスカの社会的関係に踏み込んだ先行研究も現れている。そこで次に、ワルパとナスカの社会的関係に言及している先行研究を概観する。

2-2. 地域間交流

Allison Paulsen は、ナスカ地域のワカ・デル・ロロ遺跡の円形建築が、アヤクーチョ谷から来た人々によって建設されたものであり、ワルパのナスカ地域への進出の痕跡である可能性を指摘した［Paulsen 1983］。同時に、アヤクーチョ谷とワカ・デル・ロロ遺跡の土器に関する分析も行っている。彼女は、ワカ・デル・ロロ遺跡の利用がナスカ 7 様式に対応する時期に始まり、アヤクーチョ谷の土器にもナスカ 7 様式の特徴が認められることから、アヤクーチョ谷の人々による南海岸への進出が始まったのは、ナスカ 7 様式に対応する時期であろうと推測した。

Silverman も Paulsen と同様に、アヤクーチョ谷からナスカ地域への移民が存在したと考えている。彼女は、ナスカ 7 様式からナスカ 8 様式への変化について、

1. 器面に光沢を出すための磨きによる仕上げがみられなくなる。
2. 一般に器壁の厚みや器全体の重量が増す。
3. 装飾に使用される色彩が減少する。
4. 双注口土器やパンパイプの器形がみられなくなる。その代わりに厚手の鉢（cumbrous bowl）、人面頸部壺、内湾鉢が主流となる。
5. ナスカ 8 様式の土器の中には、ネガティブ技法によって残された描画空間を除き、外面全体が色落

ちしやすい黒色顔料による彩色が行われているものがある。

6. 土器図像が、2 本の平行する太線によって挟まれた文様帯や円形の描画空間に描かれるようになる。そのような空間に描かれる図像としては、階段文、ジグザグ文、山形文、そして十字文などの幾何学文が一般的である。
7. 超自然的な図像は高度に抽象的であり、またその数も限定的である。ナスカ文化の超自然的図像において、様式化と抽象化が生じている、

という土器の装飾と製作技術における 7 つの点を挙げている［Silverman 1988:25］。これらの点から、ナスカ 8 様式はそれ以前のナスカ文化の土器の伝統から大きく逸脱しており［Silverman 1988:25］、そのような装飾上および技術上の変化は、アヤクーチョ谷から南海岸への移民の存在、あるいはアヤクーチョ谷の人々による南海岸の人々の支配を反映していると考えた［Silverman 1988:28］。

Lidio Valdez［2003］も、Silverman とは異なる視点から、アヤクーチョ谷の人々によるナスカの人々の支配があったと考えている。彼はまず、ナスカ 5 様式については紀元後 550 年頃、中期ホライズン 1A に関しては、紀元後 580 年頃という放射性炭素年代が得られていることから、両時期が同時代である可能性を指摘している(註7)。彼は、この時期アヤクーチョ谷にすでに国家が成立していたという立場に立ち、ほぼ同じ時期に、カワチ神殿の威光が失われること、そしてナスカの土器の質の低下が始まることを、アヤクーチョ谷国家による政治的脅威に起因しているのではないかと考えた［Valdez 2003:24-25］(註8)。さらに、ワルパ文化の土器にナスカ文化的要素が認められることは、アヤクーチョ谷の国家が、ナスカの優れた土器製作技術を獲得するために、ナスカの土器職人をアヤクーチョ谷へと任意もしくは強制的に連れてきたことを反映していると解釈した［Valdez 2003:25-26］。その傍証として彼は、ナスカ文化の土器にワルパ文化の土器の要素がほとんど認められない点を挙げている。すなわち、両地域間における対等な交流であったならば、双方の土器に同程度の装飾要素の授受が認められるはずだというのである。ワルパの土器がナスカの土器の忠実な模倣でない点は、ナスカの土器職人の指導のもと、アヤクーチョ谷の土器職人によって土器製作が行われた結果として理解できるという。また、クルス・パタ様式の特徴はナスカ文化の土器には現れていないとし、それはクルス・パタ様式の土器がアヤクーチョ谷の内部での消費用に製作されたためではないかと考えた［Valdez 2003:25］。

これらの先行研究を情報伝達の方向という観点から整理すると、Paulsen と Silverman の考えでは、それぞれ建築と土器に関する情報がワルパからナスカへと伝わっている。一方 Valdez の場合は、ナスカからワルパへと土器に関する情報が伝わったことになる。

このように、ワルパとナスカの具体的な社会関係および情報の伝達方向に関するとらえ方は研究者により異なる。しかし、アヤクーチョ谷社会の南海岸への進出が存在したと考えている点では Paulsen、Silverman、そして Valdez の 3 者は共通している。

これまでの先行研究の検討からは、2 つの問題を指摘することができる。すなわち、①ワルパとナスカの交流に関わる土器は、相対編年上どのように位置づけられるのか、②ワルパとナスカの間の交流の活発化は、本当にアヤクーチョ谷社会の南海岸への進出によってもたらされたのか、という問題である。これらの問題を解決するためには、まずは、ワルパ文化とナスカ文化の土器の間で共通性が認められるのは、どの土器様式間でのことなのか、そして、ワルパとナスカの間で土器の特徴が双方向も含めどの方向に伝わっているのかを明らかにする必要がある。いずれの点についても、ナスカ文化の土器との共通性を示すワルパ文化の土器の発掘資料に基づき明らかにする必要がある。筆者が行ったワンカ・ハサ遺跡の発掘調査によって、ナスカ文化の土器と

の共通性が認められる土器資料が得られた。そこで以降、筆者の発掘資料に基づきこれら 2 つの問題について考察することにする。まずは、この発掘調査について説明する。

３．ワンカ・ハサ遺跡

3-1. 遺跡概要

ワンカ・ハサ遺跡は、現在のトリゴパンパ村の周囲に位置する遺跡のうちの 1 つである。トリゴパンパ村は、行政上、アヤクーチョ州、ワマンガ郡、ティクリャス区に属しており、村中心部の標高は 2,520m である。また、この村までの距離は、アヤクーチョ州の州都であるアヤクーチョ市からは 9km ほど、ワリの首都であるワリ遺跡からは 10km ほどである（図 2）。

2001 年に筆者が行った遺跡踏査により、この村の周辺で、先スペイン期の遺構と思われる構造物が観察できる遺跡を 3 つ登録した。それらは地元住民の呼称に基づき、ワンカ・ハサ遺跡、タンタ・オルホ遺跡、クルス・パタ遺跡と命名した[註 9]。それらの中でワンカ・ハサ遺跡は、村の中心部の北方、チリコ川に面し自然の丘上に位置している（図 3）。この丘の頂上部の標高は約 2550m である。

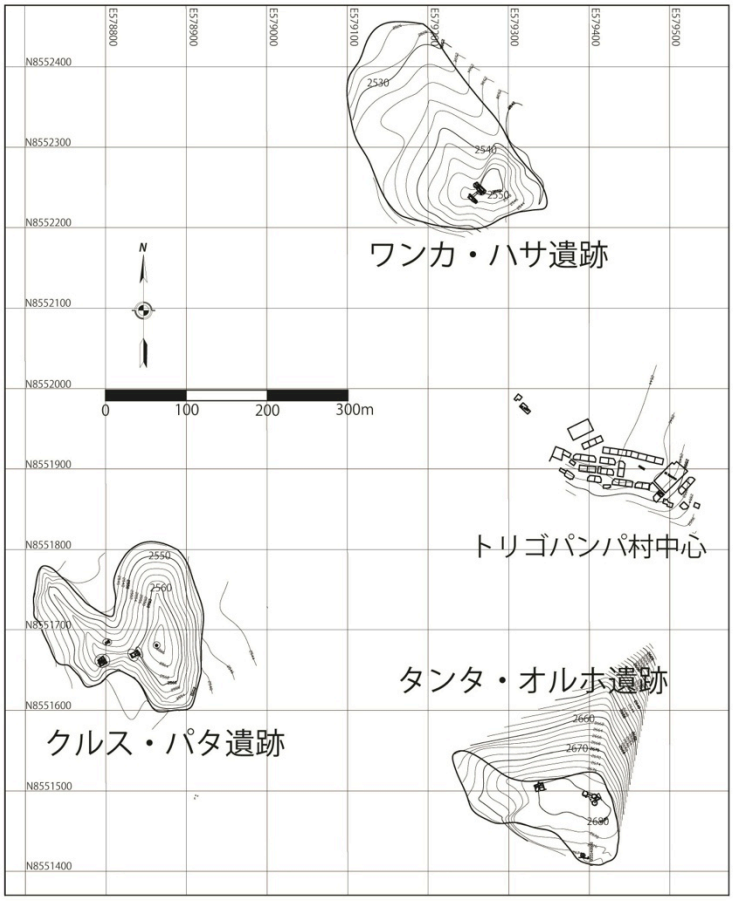

図 3　トリゴパンパ村周辺遺跡

3-2. 発掘調査

2002 年の 8 月から 10 月中旬にかけて、ワンカ・ハサ遺跡で発掘調査を行った[註10]。ワンカ・ハサ遺跡は、地形に基づき丘の頂上部付近の平坦部（以下平坦部）とその下方の斜面部（以下斜面部）に区分することができる。これら平坦部と斜面部の双方において地表から石壁の痕跡を確認することができたので、そのような石壁の痕跡によって構造物の存在が予想される地点で発掘調査を実施した。総発掘面積は 175m^2 であった。

平坦部では、石壁の切り合いの様子と層位学的関係から、3 つの建築フェイズを確認し、それぞれ古い順に第 1、第 2、第 3 建築フェイズと名付けた。建築フェイズとは、大規模な建て替えや改築にもとづき設定した時期区分であり、ワンカ・ハサ遺跡の平坦部における主な建設活動が 3 回あったことを意味している。一方、斜面部では、石壁の切り合いの関係から、2 つの建築フェイズの存在を確認した。

この発掘調査により、平坦部において D 字形建築（R-8）と矩形建築（R-2）が検出された。この D 字形建築と矩形建築は第 2 建築フェイズに属し、第 3 建築フェイズの新たな建物を建設するために、破壊されて埋められていた。建築と関連する土器から判断するならば、第 2 建築フェイズは前期中間期に、第 3 建築フェイズは中期ホライズンに属すると考えられる。関連する土器は変化しているものの、第 2 建築フェイズと第 3 建築フェイズの建築の建設技術、建築軸、そして一部屋の広さに変化が認められないことから、この遺跡は、前期中間期から中期ホライズンにかけて連続的に利用されていたと考えられる。D 字形建築内外の床面上からは、器種毎にまとまった形で、完形および半完形土器が大量に出土した[註11]。それらの中には、類例のない器形や手の込んだ装飾が施されたものが多く含まれていた。また、矩形建築内部の床面上からも、用途不明の筒状の土製品が出土した。

土器や土製品自体の特徴とそれらの出土状況は、建物を放棄するさいに、それらの土器や土製品が奉納品として床面上に置かれ、ほぼ同時に埋められたことを示していた。そのため、D 字形建築と矩形建築の床面およびそれらの間の生活面上から検出された土器は、第 2 建築フェイズの建築の放棄に関わる一括土器として扱うことが可能である。次章では、第 2 建築フェイズの床面上および生活面上で検出されたそれらの土器および土製品の特徴について述べる。

4．第 2 建築フェイズ床面検出土器

4-1. 土器の分類

ここでは先行研究に従い、本論に関係する土器の様式とタイプについて説明しておく。ワンカ・ハサ遺跡の第 2 建築フェイズに対応する床面および生活面直上で検出された土器は、ワルパ様式とクルス・パタ様式に分類できる。さらに各様式は、その装飾上の特徴に基づく下位分類としてのタイプに細分できる（図 4）。

ワルパ様式は、先行研究によりベージュ地彩文、白地黒彩、三色彩文の 3 つのタイプに細分されている［Benavides 1984:55-57］。ワンカ・ハサ遺跡の第 2 建築フェイズに対応する床面および生活面直上から出土した土器には、これら 3 つのタイプに加え、オレンジ地の上に他のワルパ様式と同様の装飾が施されている例が含

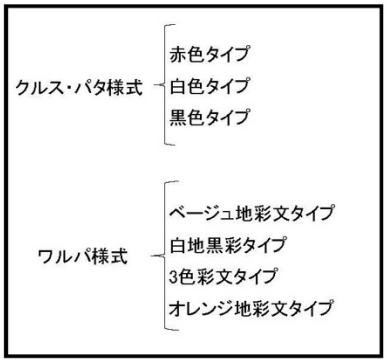

図 4 土器の様式とタイプの関係

まれていた。それを本論では、ワルパ様式4つ目のタイプであるオレンジ地彩文タイプとして扱う。

ワルパ様式の装飾の特徴は、単純な幾何学文を使用している点である。ワルパ・ベージュ地彩文タイプでは、装飾要素が簡素であることが多く、口縁上が黒塗りされているだけの場合や、口縁上の黒塗りの一部を白く塗り、その白地部分に口縁を横切るように黒線が引かれているだけの場合も珍しくない。

ワルパ白地黒彩タイプでは、白地の上に黒で装飾要素が描かれる。装飾としては、単純な幾何学文である波状文、市松文、縦及び横方向に描かれる帯状の太い黒線などがある。

ワルパ3色彩文タイプは、装飾に白、黒、赤の3色が用いられる。文様としては、縦と横の直行する黒線によってマス目を描き、マス目内部を白と赤によって交互に塗りつぶした市松文や、水平方向に引かれた2本の太い黒線によって挟まれた帯状の空間内部に、交互に隙間なく赤と白の太線が描かれ、それらの色の境界に縦方向の太い黒線が引かれたものなどがある。また、帯状の太い赤線で凹凸を繰り返す文様を描いたものもあり、その太い赤線は2重の黒線によって縁取られている。

ワルパ・オレンジ地彩文タイプは、暗いオレンジ色の地の上に幾何学文が描かれるのが特徴である。このタイプの短頸壺では、口縁上が白く塗られ、その上に帯状の太い黒線や、口縁を横断するように黒線が数本単位で引かれている。また、そのような短頸壺では、口縁から胴部にかけて帯状の赤線が縦に描かれ、その両脇に縦に数本の黒線が描かれるのが一般的である。

クルス・パタ様式は、ワルパ様式とナスカ文化の土器の特徴の両方を示す。3色以上を使用して複雑な文様が描かれたものが多く、器面はよく磨かれているが細い溝状の磨き痕が残る。胎土はワルパ様式とよく似ているが、ワルパ様式が単純な幾何学文で装飾されているのに対し、曲線を多用する複雑な図像が描かれている点がこの様式の特徴である。

先行研究では、クルス・パタ様式に対し、背景色の違いにより赤色、白色、黒色の3つのタイプが設定されている［Leoni 2009:141-146］。クルス・パタ赤色タイプは、赤色もしくは褐色の地の上に白や黒で文様が描かれる［Leoni 2009:141-143］。クルス・パタ白色タイプは、ワルパ様式の白地黒彩タイプと区別が難しい場合があるが、ナスカ文化の土器との類似性を示す曲線的な文様によりクルス・パタ様式の白色タイプであると判断することができる［Leoni 2009:144］。最後のクルス・パタ黒色タイプは、黒地の上に赤や白で文様が描かれることが特徴である。ただし、黒地の上に直接文様が描かれる場合の他に、黒地の中に白を背景とする描画空間が設けられ、その上に図像が描かれる場合もある［Leoni 2009:146］。ワンカ・ハサ遺跡の第2建築フェイズの床面直上から出土した土器も、これら3つのタイプに当てはまるので、これらのタイプをそのまま利用することにする。

このように土器の分類方法を整理した上で、発掘調査の出土品について説明する。

4-2. 第2建築フェイズの床面直上から出土した土器

前述したように、平坦部の第2建築フェイズの建物としてD字形建築（R-8）と矩形建築（R-2）が存在する（図5）。ここでは、これらの建築内部の床面上および両建築間の生活面上より出土した土器と土製品について述べる。

まず、R-8の東部では、頸部が欠損した円錐型の底部をもつ無文の大型壺（図5:C2; 写真1）と、半完形のワルパ・オレンジ地彩文タイプの大型鉢が検出された[註12]（図5:C3; 写真2）。

大型壺の残存していた胴部の高さは32.5cm、胴部の最大幅は34.0cmであった。一方の大型鉢は、器面全体がやや暗いオレンジ色に塗装されていたが、塗装は均一ではなく色の濃さにはムラが認められる。また、口縁上

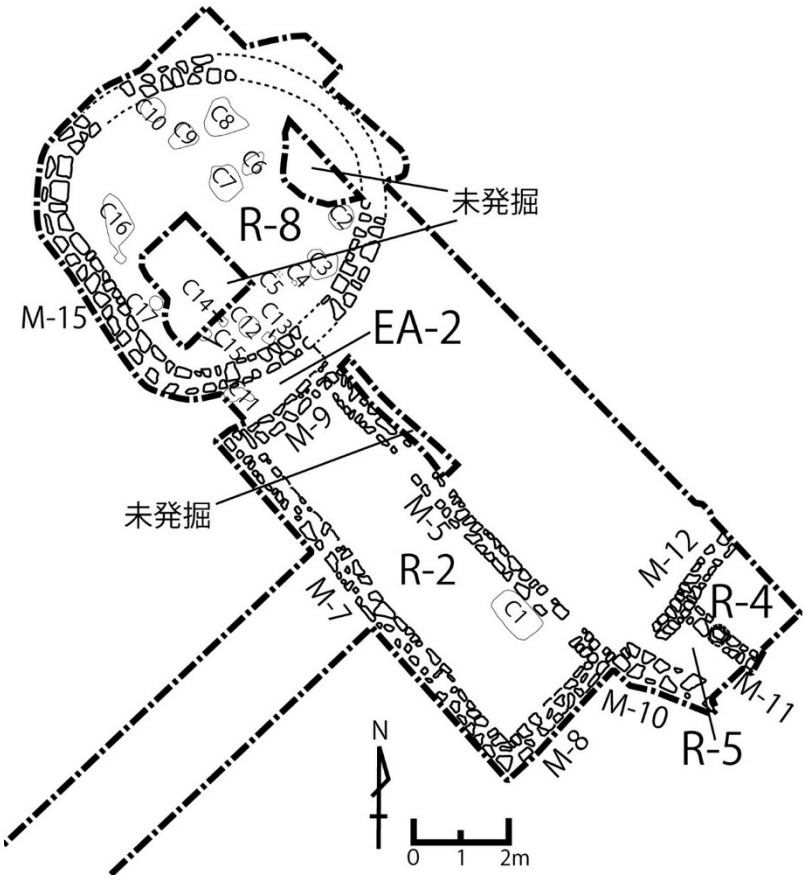

図 5　ワンカ・ハサ遺跡第 2 建築フェイズ床面直上からの土器出土状況

写真 1 大型無文壺［左］　／　写真 2 大型装飾鉢（ワルパ様式オレンジ地彩文タイプ）［右］

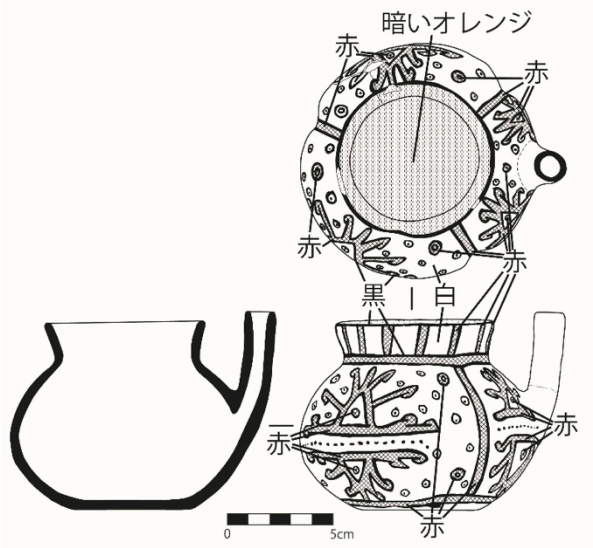

図６　注口付土器（クルス・パタ様式白色タイプ）

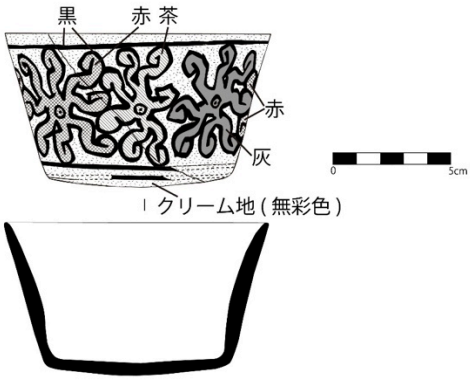

図７　装飾鉢（クルス・パタ様式白色タイプ）

は断続的に帯状に黒く塗られており、この黒く塗られた部分の間には 2 本 1 対となった黒線がほぼ等間隔に 3 対、口縁を横断するように描かれていた。さらに、この器に由来する破片からは、口縁からやや下の外面の向かい合う位置に、把手が付けられていたことが分かる。この大型鉢の口縁直径は 51.0cm、高さは 29.0cm である。

大型鉢の南西側に 40cm ほど離れた地点で、クルス・パタ様式白色タイプの注口付土器が逆さになった状態で完形品として出土した（図 5:C4; 図 6）。外面は黒線で縁取られた太い赤線によって 3 つの描画空間に分割され、描画空間内には上下で対になった三角文様が描かれていた。三角文様の角と辺からは突起物が延びている。この突起物の描かれ方や、図形の中心に圏点文が描かれていることは、他のクルス・パタ様式の土器と共通している。注口土器の口縁直径は 7.4cm、底部から口縁までの高さは 9.0cm である。

その北西側に 15cm ほど離れた R-6 の東壁の真下の床面上からは、半完形の鉢が逆さになった状態でみつかった（図 5:C5; 図 7）。この鉢も、クルス・パタ様式白色タイプに属する。外面には中央に圏点文を有する放射状

写真 3　装飾短頸壺（ワルパ様式オレンジ地彩文タイプ）

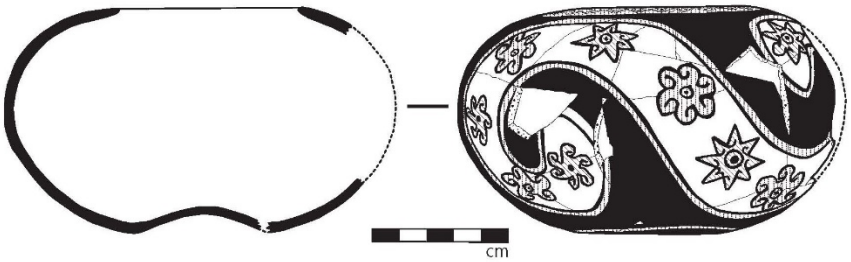

図 8　装飾球形鉢（クルス・パタ様式黒色タイプ）

文 (註13) が灰色、褐色、オレンジの 3 色で描かれている。口縁直径は、11.0cm であり、高さは 6.5cm である。

R-8 の中央付近では、クルス・パタ様式黒色タイプの球形鉢が逆さになった状態で検出された（図 5:C7; 図 8）。それらは、破損していたが、後に 5 個の個体を復元することができた。この球形鉢は、口縁の周りがオレンジ、そのほかの部分が黒で塗装され、それらが図像の背景色となっている。オレンジ部分には、黒線で縁取られた赤線によって菱形連文が描かれ、黒を背景とする部分には、白で逆 S 字形の文様が描かれている。この逆 S 字は、黒で縁取られたオレンジ色の線で縁取られており、逆 S 字形をした白地の上には、中央に圏点文を有する放射状文が描かれている。この球形鉢のうちの一つでは、2 種類の放射状文が描かれており、1 つは、放射状に延びる腕状部分が途中で丸みを帯びながら後方に反り返っている。この文様は他の球形鉢とも共通している。もう 1 つは、放射状に延びる腕状部分の屈曲部が鋭角をなしており、その結果放射状文全体として星形を呈している。この文様が確認できたのは、1 個体のみである。大きさにはバラツキがあるが、実測した個体の口縁直径は 6.5cm、高さは 8.3cm であった。

この碗の北東に隣接して、ワルパ・オレンジ地彩文タイプの、外面全体がオレンジ色に塗装された広口壺が見つかった（図 5:C6; 図 9; 写真 3）。それらは破損しており、部分的には接合可能であったものの、完全に復元することはできなかった。また、これらの広口壺の破片は、口縁部の形態および直径の比較から、少なくとも 11 個体に由来していることが判明した。口縁直径は、15cm～24cm と個体によってバラツキがある。また、

写真 4　オレンジ色に彩色された注口部（左上）と把手（下段全て）

写真 5　大型無文壺

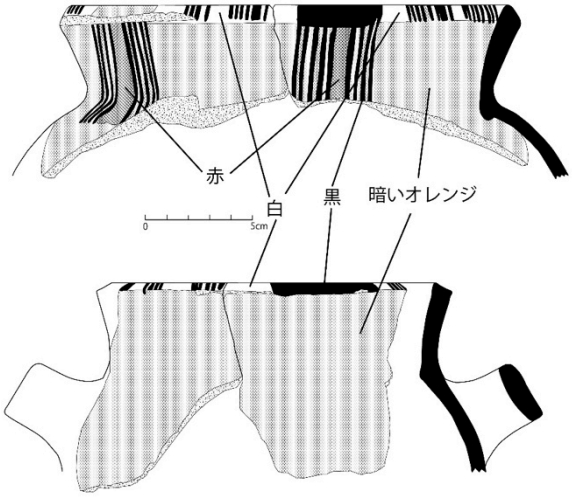

図 9　装飾広口壺（ワルパ様式オレンジ地彩文タイプ）

把手のついた破片や、オレンジ色に塗装された把手や注口も同地点から出土しており、少なくともこのタイプの土器の一部には把手や注口が付いていたことが分かる（図 9; 写真 4）。

R-8 の北側端では、土器片が集中する地点を 3 カ所検出した。1 つは R-8 の中央よりでみつかったもので、無文大型土器の把手を有する胴部破片のみが出土した（図 5:C9）。この大型土器胴部の東側では、人面を模した大型壷の頸部とその胴部と思われる破片が散乱した状況が検出された（図 5:C8; 図 10）。この人面頸部壺は、クルス・パタ様式赤色タイプに属する。また、胴部破片には、幾重にも重なる赤と白で表現された十字文が描かれていた。赤と白の境界には両者を区別するように黒線が引かれている。さらに R-8 北側の壁際には、床面上に頸部を欠損した大型の無文壺が存在した（図 5:C10; 写真 5）。残存する 2 つの把手と、もう 1 つ把手がつ

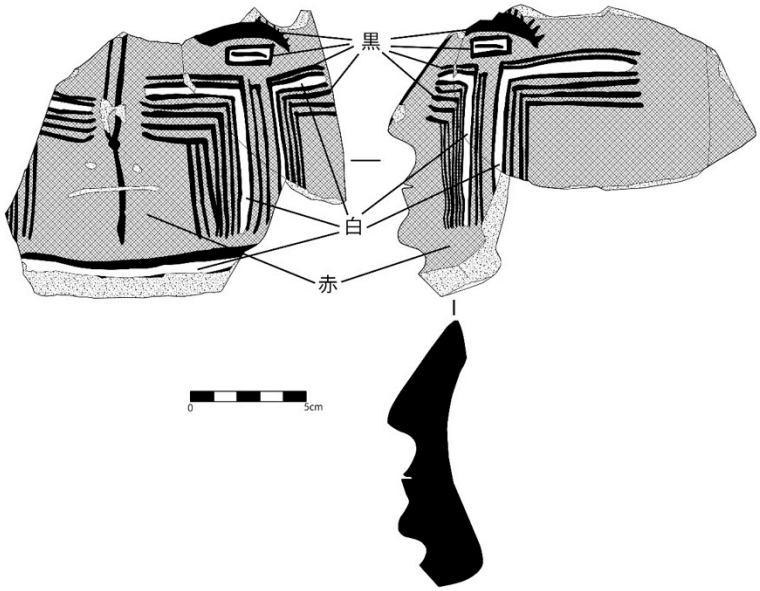

図 10　人面頸部壺（クルス・パタ様式赤色タイプ）

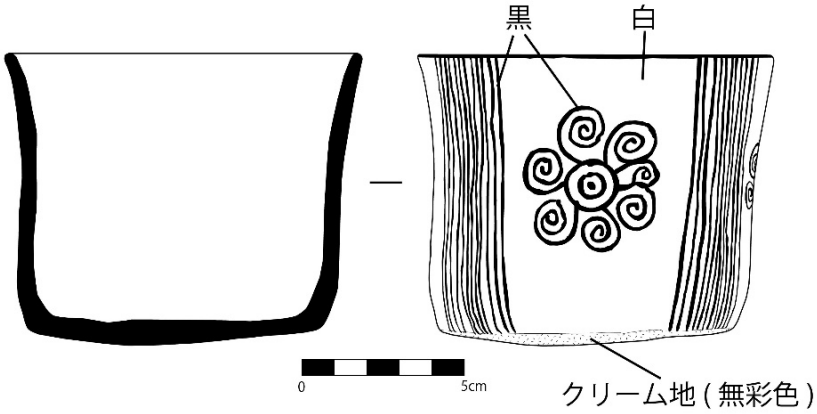

図 11　装飾コップ形土器（クルス・パタ様式白色タイプ）

いていた痕跡があることから、この大型壺にはもともと 3 つの把手が付いていたことが分かる。この土器の残存部の高さは 43cm であり、胴部の最大幅は 36.5cm であった。

R-8 の西側では、逆さになったコップ形土器が集中している地点が見つかった（図 5:C16;図 11）。これらの土器はほとんどが破損していたが、その中にはほぼ無傷のものも存在していた。その後の復元作業により、コップ形土器の破片の中にはすくなくとも 9 個体が含まれていたことが明らかになった。これらの土器の文様の描かれ方は共通しており、器の外面が白く塗られ、白く塗られた空間は黒線の束によって 4 つの描画空間に分割されている。各描画空間には中央の二重圏点文から渦巻き状の腕部が伸びる放射状文が描かれていた。色使

写真 6　建築土器（クルスパタ様式白色タイプ）

写真 7　四脚土器（ワルパ様式ベージュ地彩文タイプ）

いは、ワルパ白地黒彩タイプと共通しているが、クルス・パタ様式に典型的な中央に圏点文を有する放射状文が描かれていることから、これらの土器はクルス・パタ様式白色タイプに分類できる。実測した個体の大きさは、口縁直径が 9.0cm、高さが 10.8cm であった。

これらの土器のさらに南側からは、建物で 3 方を囲まれた広場的空間を表現した土器が出土した [註 14]（図 5:C17; 写真 6）。この土器はクルス・パタ様式白色タイプに属し、この器には本来注口がついていた痕跡がある。器の側面は、黒線で縁取られた灰色の細い帯によって、上方の白色に塗られた部分と、下方の赤褐色に塗られた部分とに分けられている。この白色部分に文様が描かれており、黒線で縁取られた赤褐色のアーチ状の帯に、中央の垂直の突起の左右にそれぞれ外側に広がる突起がついた装飾物が 3 つ付いている。また、空間を埋めるように背景が白色ともしくは赤褐色の圏点文が描かれている。一方、器の上には円錐形の屋根をもち、円形の平面プランを有する建物 2 棟と、平屋根を有し、矩形の平面プランを有する建物 1 棟が立体的に表現されている。同様に、平屋根の上に動物が 1 匹、建物の周囲に黒い斑文をもつ動物が 2 匹、さらに建物で囲まれた広場的空間に直立姿勢の人物らしき像が 3 体、立体的に表現されている。人物像と思われるものの頭部には、帽子もしくは髪の毛を表現していると思われる赤褐色の粘土紐が貼り付けられている。建築像や動物・人物像の間の何もない空間には二重円文が描かれている。底部から円錐屋根の頂点までの高さが 17.3cm、最大幅が 14.1cm である。

R-8 の南西側では、土器の集中地点を 3 地点検出した。そのうちの 1 地点では、4 本の短い脚部をもつ皿が逆さの状態で見つかった（図 5:C12; 写真 7）。それは破損した状態で検出されたが完全な状態に復元することができ、もともと破損していない状態で逆さに置かれた土器が、上からの土砂の重みによって押しつぶされた可能性がある。この器には、目立った装飾は施されていなかったが、口縁上が黒く塗られていた。したがって、ワルパ・ベージュ地彩文タイプとして分類することができる。この土器の口縁直径は 31.5cm であり、脚の先端から口縁までの高さは 12.0cm である。

そこから 15cm ほど南東に離れた R-8 の壁に隣接して、同じく逆さになって破損した状態で胴部下方にくびれ

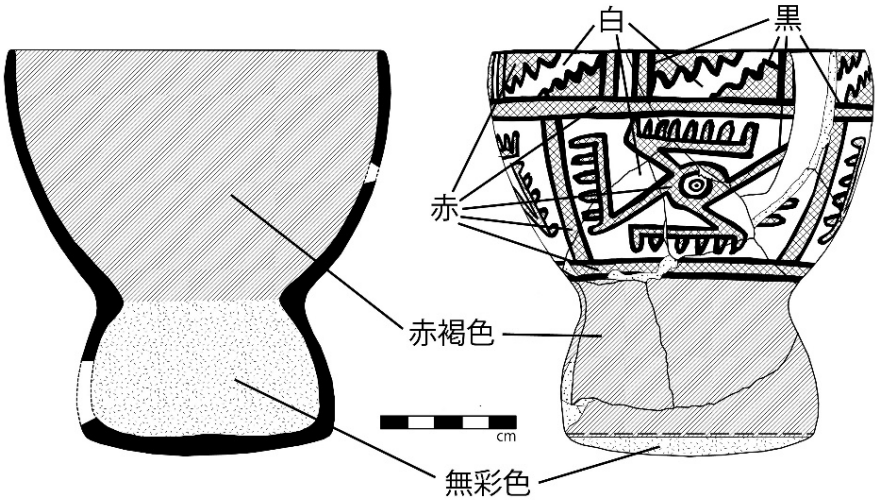

図 12　装飾杯（クルス・パタ様式白色タイプ）

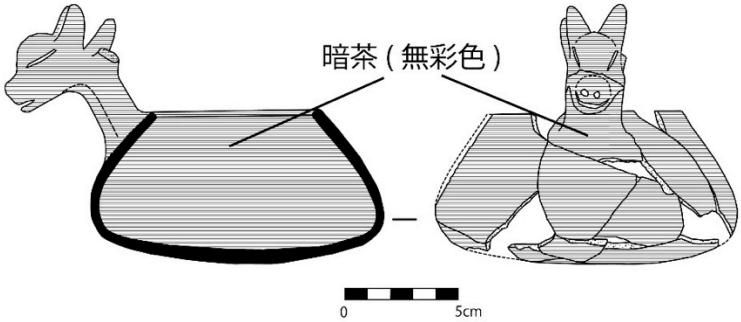

図 13　シカ形土器（様式不明）

をもつクルス・パタ様式白色タイプの杯が見つかった（図 5:C13; 図 12）。この器形はナスカ文化の研究者がゴブレットと呼ぶ器形に相当する。

この杯の胴部のくびれより上の部分は、黒線で縁取られた水平方向の赤線によって口縁周りの部分とその下の胴部中央部分の 2 つに分割されており、口縁周りはさらに 2 本 1 組となった黒線で縁取られた縦方向の赤線によって全部で 7 つの描画空間に分割されている。口縁周りのそれぞれの描画空間内には、対角線上に向き合った 1 対の階段状文が描かれている。その下の胴部中央部分は、黒線で縁取られた縦の赤帯によって 4 つの描画空間に分割されており、それぞれの描画空間には、二重圏点文を中心とし、四方に 4 本の腕状の付加物が延びる文様が描かれている。腕状部は描画空間に収まるように中央付近で鋭角に折れ曲がり、折れ曲がった先は櫛歯状になっている。この図像は、他のクルス・パタ様式の土器にみられる、中央に圏点文を有する放射状文の一種として理解できる。胴部のくびれより下の部分は、暗いオレンジ色に塗装されている。また、内部も口縁からくびれ部分にかけて橙色に塗装されていた。この器の直径は 13.5cm、高さは 15cm である。

さらにこの地点の南西側では、シカを模した塑像土器 (註15)（図 5:C14; 図 13）と、人間の顔を模した土器（図 5:C15; 写真 8）が見つかった。シカ形土器は、よく研磨されており、細い溝状の研磨の痕跡がはっきりと残っていた。器全体が暗褐色を呈しているが、割れ口の断面は酸化焼成を示している。このような土器は稀であり、

写真 8　人面土器（ワルパ様式ベージュ地彩文タイプ）

写真 9　R-2 における筒状土製品の出土状況

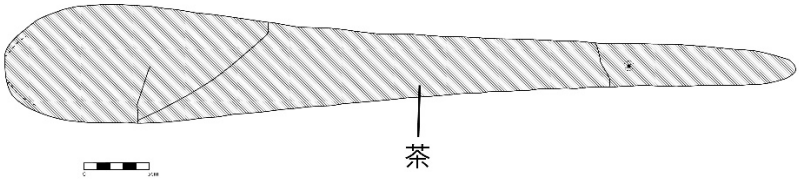

図 14　筒状土製品（様式不明）

どの様式やタイプにも分類することができない。器の口縁は楕円形をしており、縦径が 7.5cm、横径が 8.7cm であった。器高は 11.5cm である。

人面土器は、全体の 7 割ほどを復元することができた [註16]。装飾上の特徴から、ワルパ・ベージュ地彩文タイプに分類することができる。口縁は楕円形をしており、縦径は 8.5cm、横径は計測できなかった。また、高さは 13.1cm であった。

なお、R-8 に類似した状況は他の場所でもみつかっている。それが R-2（図 5:C1）と EA-2（図 5:C11）であり、それらの場所でも意図的に置かれたと考えられる土器や土製品の痕跡がみつかっている。

R-2 では、複数の筒状土製品が集中して検出された（写真 9）。復元の結果、それらは最低 5 個体存在していたことが確認できた。筒状土製品は細長い円錐形をしており、両端は丸みを帯びている（図 14）。胴部は中空であり、外面全体が暗いオレンジ色に塗装されている。この塗装の色はワルパ・オレンジ地彩文タイプに類似しているが、他に装飾は認められない。幅の広い側の先端部分が開口部となっており、先細りになっている側の側面には直径 2mm の小さな穴が開いている。この土製品の機能は不明であるが、その形態から楽器であった可能性がある。出土品のなかで最も大きなものを実測し、全長が 58.7cm、先端開口部直径が 2.1cm、そして最大幅が 9.0cm であった。

写真 10　大型装飾匙（ワルパ様式三色彩文タイプ）

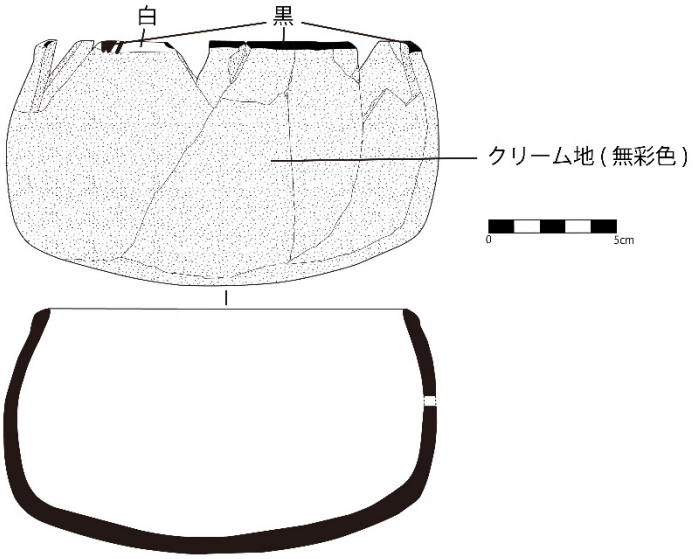

図 15　装飾半球形鉢（ワルパ様式ベージュ地彩文タイプ）

R-2 と R-8 の間の空間が EA-2 である。ここからは、口縁部が装飾された半球形鉢と（図 15）、大型の匙（写真 10）が出土した。半球形鉢は、口縁にのみ装飾が認められ、口縁上が白と黒の帯や線で装飾されており、ワルパ・ベージュ地彩文タイプに相当する。口縁直径 14.0cm、器高 9.5cm、胴部最大幅は 17.0cm であった。大型の匙は、ツボ口縁部と把手部分が黒、赤、白の 3 色で装飾されており、ワルパ三色彩文タイプに属する。ツボ部分の口縁直径は縦 14.0cm、横 7.6cm、全長 23.1cm、最大幅 8.0cm であった。

第 2 建築フェイズの床面上で検出された土器は、従来の報告にはみられない装飾や形態を有するものが多い。また、それらには、繰り返し使用されたことを示す軽微な摩耗や破損は認められない。同じ器種のものに関し

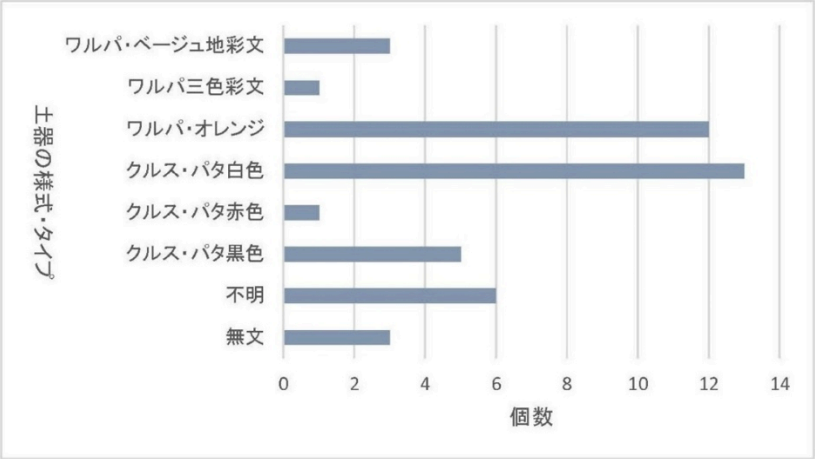

図 16　ワンカ・ハサ遺跡、第 2 建築フェイズ床面直上検出土器の様式・タイプ

ては、器種毎にまとまって出土していた。そのような特徴から判断するならば、それらの土器は奉納品として製作され、意図的に床面上に置かれたと考えられる(註17)。

第 2 建築フェイズの建物の床面上から出土した土器の様式・タイプで、最も多かったのはクルス・パタ様式の白色タイプであり、その次にワルパ・オレンジ地彩文タイプが続く（図 16）。残りはクルス・パタ黒色タイプ、ワルパ・ベージュ地彩文タイプ、ワルパ三色彩文タイプ、そして他に類例のないシカ形土器であった。判明した土器の様式は、全て前期中間期に属する。一般に先行研究ではクルス・パタ様式は前期中間期に位置づけられているが［Lumbreras 1974; Leoni 2009］、これまで発掘調査においてクルス・パタ様式の土器が中期ホライズンの様式（表 1 参照）の土器と区別できる形で出土したという報告はない。そのため、ワンカ・ハサ遺跡の発掘調査において、クルス・パタ様式の土器が、出土状況において中期ホライズンの様式の土器と区別できることが確認できた意義は大きい。

ここまで、ワンカ・ハサ遺跡の一括土器の出土状況とその様式的特徴について述べると共に、各土器の器形や装飾上の特徴についても説明してきた。次章では、ワンカ・ハサ遺跡の一括土器とナスカ文化の土器の装飾及び器形を比較することにより、ワルパとナスカの間で、土器に関する情報がどのように伝わっているのかを論じる。

５．ワンカ・ハサ遺跡出土資料とナスカ文化の土器の比較

5-1. 図像

アヤクーチョ谷の土器装飾にナスカの土器の装飾要素が認められることは以前より指摘されてきた。すでに述べたように、Menzel［1964:9-10］と Lumbreras［Lumbreras 1974:95］は、アヤクーチョ谷の土器とナスカ 7、8 様式との関連性を指摘している。そこでここでは、ワンカ・ハサ遺跡出土土器に認められるナスカ文化の土器との関連性を示す図像要素とその起源について検討する。

5-1. 1）　階段文

ワンカ・ハサ遺跡出土の杯の口縁部に描かれている階段文は（図 12）、ナスカの土器の比較的早い時期に現

れている。ナスカ文化の土器では階段文は、ナスカ 3 様式（表 1, 表 2）にまでさかのぼることができ［Kroeber and Collier 1998:fig.120, fig. 121, fig.129, fig.142, fig.149, fig.150, fig.177］、この文様はナスカを代表する建造物であるカワチ神殿の壁面装飾にも用いられている［Orefici 2012:437-451］。ナスカ 3 様式の土器では、階段文は主に浅鉢外面の装飾に用いられているが、ナスカ 5 様式のコップ形土器［Kroeber and Collier 1998:fig.255, fig.263, fig.296］と鉢［Kroeber and Collier 1998:fig.274］、ナスカ 6 様式のコップ形土器［Kroeber and Collier 1998:fig.297］と壺［Kroeber and Collier 1998:fig.292］、ナスカ 7 様式の杯［Kroeber and Collier 1998:fig.319］の装飾要素として認められる。さらに、ナスカ 8 様式の杯 (註18) ［Eisleb 1977:fig.237］では、ワンカ・ハサ遺跡のものと同様に口縁部の装飾としてこの文様が用いられている。

筆者の知る限りワルパ様式の土器には階段文による装飾は認められず、クルス・パタ様式の土器でも一般的ではない。その一方で、南海岸では、比較的早い時期にこの文様が出現し、その変遷を追跡することも可能である。したがって、後述する他の文様と同様に、この文様は南海岸で発達したのちにアヤクーチョ谷へと伝わった可能性が高い。

5-1. 2） 放射状文

放射状文にはいくつかの種類が存在する。放射状の線はまっすぐ伸びるように描かれる場合と、一定の方向に向かって湾曲するもしくは渦を巻くように描かれる場合がある。一定の方向に湾曲するように描かれたものは文様全体として回転しているように見えることから、回転放射状文と呼ぶことにする。この回転放射状文は、ワンカ・ハサ遺跡から出土したクルス・パタ様式の土器の主要な装飾要素となっている（図 7、図 8、図 11、図 12）。ワンカ・ハサ遺跡の資料に表現された回転放射状文と類似した図像は、ナスカ文化の土器にも存在する。様式が特定できるナスカ文化の図像は限られるものの、ワンカ・ハサ遺跡の図像に類似した例は、ナスカ 7 様式の「神話的サル」の付加物［Proulx 2006:fig.5.80］や、ナスカ 8 様式の土器の図像に認められる［Kroeber and Collier 1998:fig.369b; Strong 1957:fig.15.J］。とくに、ナスカ 8 様式の図像との類似性が高い。

この図像の起源を特定することは困難である。ナスカ 4 様式の超自然的人物像の舌先にある「首」を抽象化したもの［Proulx 2006:fig.5.26; cf. Seler 1961［1923］:fig.72-76］、あるいはナスカ 6 様式の超自然的人物像の頭部とその頭飾りに由来する「連続する頭部」のモチーフからの変化したものであると考えられる［Sawyer 1975:fig.144; 坂井編 2008:写真 10、写真 13］。Donald Proulx が指摘しているように、異なる起源を有する図像がひとくくりに放射状文と呼ばれている可能性がある［Proulx 2006:110-111］。放射状文や回転放射状文の起源を特定することは難しいが、いずれにせよこの文様の出現は、アヤクーチョ谷よりも南海岸での方が早いと考えられるため（表 1）、放射状文も南海岸からアヤクーチョ谷へと伝わったものであると考えられる。

5-1. 3） 渦巻き文

渦巻き文は、クルス・パタ様式の土器に一般的な文様であり［Lumbreras 1974:95］、ニャウィンプキオ遺跡出土資料の中では、クルス・パタ白色タイプの土器の図像として最も頻度の高いものであった［Leoni 2009:144］。ワンカ・ハサ遺跡の出土資料の中では、渦巻き文は、コップ形土器の装飾要素として観察され、全体として放射状文を呈する文様の要素として、中央の二重圏点文から発する腕状部分となっている（図 11）。

Menzel は、ワルパ様式に特徴的な図像としてこの渦巻き文を挙げており、とくに白地上に黒線で渦巻き文が描かれるのはナスカ 7 様式の特徴であると述べている［Menzel 1964:9; cf. Knobloch 1983:281; Kroeber and Collier 1998:fig.359］。ナスカ 7 様式との関連性を示す渦巻き文はクルス・パタ様式の特徴として位置づけることがで

き［Leoni 2009:144］、次章で論じるように、アヤクーチョ谷での出現は前期中間期の比較的遅い時期になってからであると考えられる。一方南海岸においては、この文様はナスカ 3 様式（表 1）の土器にも表現されている［Eisleb 1977:fig.172-173; Kroeber and Collier 1998:fig. 185］。やはり渦巻き文も、南海岸からアヤクーチョ谷へと伝わったものであると考えられる。

5-1. 4） 縁飾りの付いた三角文

ナスカ文化の土器とワルパ文化の土器との共通性を示す図像として、縁飾りの付いた三角文も挙げることができる。ノブロックによれば、三角文はナスカ文化のシャチのヒレを抽象化したものである［ノブロック 1991:111; cf. Seler 1961:figs.333, 334, 334a］。

ワンカ・ハサ遺跡の出土品はこのことを裏付けている。R-8 の床面直上から出土した土器の 1 つである注口付土器には、その胴部に放射状に延びる縁飾りの付いた三角文が描かれていた（図 6）。三角文の頂点部分には三つ叉に分かれた突起がついている。中央の突起はまっすぐに伸び、その両脇にある外側に向かって伸びる突起の先端は左右に開きながら反り返っている。

図 17　ナスカ 6 様式の神話的シャチ（Harth-terré 1965: pl.2 を筆者トレース）

これとよく似たものがナスカ 6 様式の図像の中に存在する［Harth-terré 1965; 図 17］。それは、ナスカ文化の図像の中で神話的シャチと呼ばれるものであり［Proulx 2006:83-84］、自然界のシャチとは異なり手足を伴う人間的な姿で描かれている。シャチのヒレは三角形で表現されており、ヒレの頂点、すなわち三角形の先端部分及び側面には三つ叉に分かれる突起状の装飾が付加されている。この図像とワンカ・ハサ遺跡の土器図像との類似性は、ワルパ文化に、先行研究で指摘されているナスカ 7 様式及び 8 様式に加え、ナスカ 6 様式の要素も認められる可能性を示している。

シャチはナスカ文化の主要な図像テーマの 1 つであり、ナスカ文化圏である南海岸において生み出され発達したものであると考えられる。ワンカ・ハサ遺跡から出土した土器に描かれた三角文様が、ナスカ文化のシャチのヒレと高い類似性を有していることは、この文様が南海岸に由来していることを示している。

5-2. 器形

先行研究では、ワルパ文化の土器についてナスカ文化の土器との類似性が指摘されているのは主に装飾についてであり、器形の類似性に関する指摘はあまりなされていない。D 字形建築から出土した杯は、ワルパとナスカの交流の存在を明確に示すという点で、両社会が存在した地域間の関係を考察するための貴重な資料であるといえる。

この杯に分類される器形は、その起源をナスカ 6 様式にまでたどることができるが、一般化するのはナスカ 7 および 8 様式においてである［Eisleb 1977:Fig.237-242, 245-247; Knobloch 2000:Fig.3; Kroeber and Collier 1998:fig.345, 350, 352; Proulx 2006:41; Silverman and Proulx 2002:33］（表 1）。アヤクーチョ谷におけるこの器形の存在は、ワ

ンカ・ハサ遺跡の発掘調査によりはじめて確認されたものであり、この地域ではその先行形態は知られていない。したがってこの器形は、南海岸のナスカで発達したものがアヤクーチョ谷へ伝わったものであると推測できる。またこの器形に関しては、ナスカ 7 様式からナスカ 9 様式へと変化するにしたがい、全体的に太くずんぐりとした形態からしだいに細身になってゆく傾向が認められる［Knobloch 2000:Fig.3］。ワンカ・ハサ遺跡から出土した杯は、幅広のナスカ 7 様式のものよりも細身のナスカ 8 様式のものとの類似性が高い［Eisleb 1977:Fig.237-242, 245-247; Knobloch 2000:Fig.3c; Kroeber and Collier 1998:fig.345, 350, 352］。そのため、この器形が南海岸からアヤクーチョ谷に伝わった時期は、ナスカ 8 様式に対応する時期であると考えられる。

杯上の文様が描かれる空間の分割の仕方、すなわち文様帯の設定の仕方も、ワンカ・ハサ遺跡の杯とナスカ 8 様式の杯との関連性を示す。ワンカ・ハサ遺跡の杯の外面は、二本の黒線で縁取られた水平方向に平行して引かれた赤線によって上段、中段、下段の 3 つの空間に分けられており、それらのうち、器の屈曲部より上に位置する上段と中段が文様帯となっていた。ナスカ 8 様式の杯にも、ワンカ・ハサ遺跡のものと同様に、水平方向の文様帯が設けられているものが多く［Eisleb 1977:fig.235-238, fig.240-241, fig.245-247］、中には器の屈曲部よりも上方の文様帯にのみ図像が描かれている例も存在する［Eisleb 1977:fig.235, fig.239, fig.242］。

ワンカ・ハサ遺跡の杯の図像的特徴も、この器形がナスカ文化に由来するという考えと矛盾しない。ワンカ・ハサ遺跡から出土した杯の口縁沿いの上段の文様帯には、黒で縁取られた縦方向の短い赤帯によって挟まれた 7 つの描画空間が存在する。それぞれの描画空間内の左上方と右下方には、対角上に向き合うように階段文が描かれている。一方、その下の文様帯は 4 つの描画空間に分割されている。それぞれの描画空間には、回転放射状文が描かれている。この回転放射状文では、中央の二重圏点文から腕状部が四方に伸びており、それらの腕状部は途中で鋭角に折れ曲がり、折れた先の部分には櫛歯状の短い線が描かれている。この図像は、二重圏点文を中心とし、そこから四方に腕状部が伸びているという点で回転放射状文の特徴を示しており、腕状部が直線的に表現されている点が他の事例とは異なるものの、回転放射状文の一種としてとらえることができる。これら階段文と回転放射状文は、前項で検討したように、ナスカ文化に由来すると考えられるものであり、それらが描かれている器の形がナスカ文化に由来すると考えることの傍証となる。

これまでのワンカ・ハサ遺跡とナスカ文化の杯の比較により、ナスカ 8 様式が製作・使用されていた時期にこの器形が南海岸からアヤクーチョ谷へと伝わった可能性が明らかになった。文様帯の設定の仕方にもワンカ・ハサ遺跡の杯とナスカ 8 様式の杯の間で共通性が認められることは、この考えを支持するものである。さらに、ワンカ・ハサ遺跡の杯に描かれていた図像も、前項で検討したナスカ文化に由来すると考えられる図像であり、それらの図像とともにこの器形が南海岸からアヤクーチョ谷へと伝わったと考えられる。

5-3. まとめ

ワンカ・ハサ遺跡出土の一括土器とナスカ文化の土器との比較により、クルス・パタ様式の土器とナスカ 8 様式との間での装飾および器形における共通性が判明した。クルス・パタ様式とナスカ 8 様式の土器に共通する独特な器形の存在が確認できたのは初めてであり、ワンカ・ハサ遺跡の資料は、クルス・パタ様式とナスカ 8 様式の密接な関係を示す貴重な資料であるといえる。さらに、クルス・パタ様式の土器の装飾要素として、相対編年上より古い時期のナスカ 6 様式およびナスカ 7 様式の要素も認められた。このことは、ナスカ 8 様式に対応する時期の装飾要素の一部が、より古い時期にも認められることを示している。ただし先述した Vaughn らの分析によれば、ナスカ 6、7、8 様式には、製作年代に重なる部分がある可能性が有り［Vaughn 2014:fig.3］、それらの様式の土器が同時に存在していた可能性もある。

クルス・パタ様式の、すなわちワルパ文化の土器の装飾に認められるナスカ文化に由来すると考えられる図像は幾何学文に限られ、ナスカ文化の超自然的な図像に由来する文様の場合にも、その全体ではなく、それを構成する図像の一部のみがワルパの土器に表現されていた。したがって、ワルパ文化の土器におけるナスカ文化に由来する要素を、ワルパの土器製作者によるナスカ文化の土器の単なる模倣としてとらえることはできない［Knobloch 1983:291; Valdez 2003:25］。ワルパの土器製作者は、あくまでもワルパの土器伝統における歴史的脈絡の中で、ナスカ文化の土器の文様の一部を選択しながら取り入れていたことを示している［Knobloch 1983:315］。

クルス・パタ様式の土器とナスカ文化の土器の双方に共通して認められる装飾要素と器形の発達過程を、南海岸において追うことができることも明らかになった。それに対し、クルス・パタ様式の土器には、ナスカ文化と関連する図像や器形が先行形態なしに突然現れており、同時にナスカ文化にみられる図像の一部のみが描かれている。このことから、ワルパ文化とナスカ文化の土器の両者に共通する要素において、アヤクーチョ谷に先に現れたものが後に南海岸のナスカ文化へと伝わったとは考えにくく、南海岸で発達した装飾要素と器形が、南海岸でナスカ 8 様式の土器が製作･使用されていた時期にアヤクーチョ谷のクルス・パタ様式の土器へと伝わったと考えるのが妥当であろう。ただし、ナスカ 8 様式とクルス・パタ様式との関係については、前述したように編年上の問題があり、この問題に関しては次章においてより詳細に議論する。

土器の装飾・器形において、ワルパからナスカへと伝わった要素に関してははっきりと確認することはできなかった。すなわち、土器の図像や器形においては、ワルパとナスカの関係は双方向的ではなく、それらの情報の伝達方向としてナスカからワルパへという方向性が認められる。このようなナスカからワルパへという土器情報の伝達がどのようにして生じたのかという点についても、次章において議論する。

６．ワルパとナスカ

6-1. 交流の時期

ワンカ・ハサ遺跡から出土した一括土器との、装飾および器形における対応関係を想定することができるナスカ文化の資料は限られるものの、ワンカ・ハサ遺跡のクルス・パタ様式の土器には、ナスカ 8 様式との関連性が認められた。クルス・パタ様式とナスカ 8 様式との関連性は、以前より指摘されていたことではあるが［Lumbreras 1974:95］、装飾上の具体的な類似点が確認できたことに加え、器形の共通性も明らかになった。

この分析結果から、両者の交流が活発化した時期は、アヤクーチョ谷ではクルス・パタ様式の土器が製作・使用されていた時期に、南海岸ではナスカ 8 様式の土器が製作･使用されていた時期に対応すると考えられる。しかし第 2 章第 1 節第 1 項で述べたように、クルス・パタ様式は、アヤクーチョ谷の編年で前期中間期に位置づけられており、一方ナスカ 8 様式は、南海岸の編年で中期ホライズンに位置づけられているという問題が存在する。前期中間期と中期ホライズンの境界をめぐる問題は、本論の資料のみで解決できるものではないが、これまでの分析結果と先行研究の成果に基づき、クルス・パタ様式とナスカ 8 様式の編年上の位置づけについて、一つの可能性を提示したい。

ワンカ・ハサ遺跡では、クルス・パタ様式の土器は、ワルパ様式の土器とのみ共伴し、そこに中期ホライズンの土器の混在は認められなかった。したがって、クルス・パタ様式の始まりは、前期中間期に求めることができる。その証拠に、筆者が調査したタンタ・オルホ遺跡でも、クルス・パタ様式の土器は中期ホライズンの土器とは共伴していなかった［土井　2011］（図 3）。しかしその一方で、クルス・パタ様式と共通する装飾要

素が認められるナスカ 8 様式は、中期ホライズンの土器との共伴が指摘されている［Schreiber 2001:440; Isla 2001:557］。この状況を素直に解釈すると、前期中間期のクルス・パタ様式から、中期ホライズンのナスカ 8 様式へと装飾要素が伝わったということになる。しかしながら、これまで論じてきたように、クルス・パタ様式とナスカ 8 様式に共通する装飾要素の起源とその変遷過程に注目するのであれば、最初に南海岸に現れその地で徐々に変化してきたと考えられる装飾要素が、ナスカ 8 様式よりも先に突如アヤクーチョ谷のクルス・パタ様式の方に現れたと考えるのは不自然である。そこで考えられるのは、ナスカ 8 様式の始まりもクルス・パタ様式同様に前期中間期にさかのぼり、ナスカ 8 様式からクルス・パタ様式に装飾要素が伝わったという可能性である。つまり、中期ホライズンに先行する、前期中間期の中でも比較的遅い時期に、ナスカ 8 様式からクルス・パタ様式に土器の装飾要素が伝わったと考えられる。南海岸には、前期中間期のクルス・パタ様式と同時代の、中期ホライズンの土器と共伴せずにナスカ 8 様式の土器、もしくはナスカ 8 様式の土器およびそれ以前の時期の土器のみを伴う遺跡が存在すると予想される。Knobloch［2005］が土器の図像の変化に基づき、これまでナスカ 8 様式とまとめて呼ばれてきた土器を、前期中間期末期のナスカ 8 様式と中期ホライズンのロロ様式とに区別したことは先に述べた。前期中間期におけるナスカ 8 様式とクルス・パタ様式の同時代性を示唆するワンカ・ハサ遺跡の資料は、図像のみに基づく Knobloch の考えを発掘資料の側から補強するものであるといえる。

その一方で、Lumbreras はクルス・パタ様式の後半と中期ホライズンのオクロス様式との強い関連性を指摘している［Lumbreras 1974:95-96］。また、Knobloch によれば、クルス・パタ様式の土器は中期ホライズン 1A のコンテクストから出土しているという［Knobloch 1991:248］。そのため筆者は、クルス・パタ様式の後半は、ナスカ 8 様式同様中期ホライズンに属すると考えている。現時点での予想としては、ナスカ 8 様式とクルス・パタ様式の製作・利用時期はほぼ重なり、両者共に、前半は前期中間期から中期ホライズンへと移行しようとする時期、言い換えるならば、前期中間期の比較的遅い時期（後期もしくは末期）に、後半は中期ホライズン 1A に属すると思われる。Knobloch［2005］に従えば、前者はナスカ 8 様式、後者はロロ様式に対応する時期ということになる。

このように、ワンカ・ハサ遺跡第 2 建築フェイズの床面上から出土した資料とナスカ文化の土器との関係から判断すると、ワルパとナスカとの間で活発な交流が存在したのはアヤクーチョ谷ではクルス・パタ様式の土器が、南海岸ではナスカ 8 様式の土器が製作・使用されていた時期であり、それは前期中間期の中でも比較的遅い時期であったと考えられる。そこで次に、この時期の両者の交流がどのような性格のものであったのかについて考えてみたい。

6-2. 交流の場所

ワンカ・ハサ遺跡から出土した土器の検討結果は、土器の器形や装飾においてナスカからワルパへと情報が伝わった可能性を示していた。しかしこの結果自体は、ワルパとナスカの間でどのような交流が存在したのかを示してはいない。どのような交流が存在したのかを明らかにするために、まずは先行研究によって示されている考えと、現在考古学的に明らかになっている事実との間に、整合性が認められるのか否かを検討する。

前述したように Paulsen は、ワカ・デル・ロロ遺跡の石造円形建築の存在が、ワルパの人々がナスカ地域へ進出した痕跡であると考えた［Paulsen 1983］。しかし現在では、Paulsen の主張とは異なり、石造円形建築が、ワルパとの関係が認められるよりも前の時期から南海岸に存在することが知られている［Schreiber 1988:71; Vaughn 2009:70］(註19)。したがって、Paulsen の主張の根拠は弱い。

また、Silverman の主張も受け入れることは困難である。すでに述べたように彼女は、ナスカ 8 様式に認められるナスカの土器伝統における大きな変化は、ワルパ文化の土器から伝わった特徴を示しており、ワルパのナスカ地域への進出や、ワルパによるナスカの支配という出来事を反映しているのではないかと考えていた［Silverman 1988:28］。たしかに、幾何学文を主体とすることや色使いの少なさはワルパ文化の土器装飾の特徴ではあるが、そのような特徴はワルパ文化に限られるものではない。本論での分析によれば、Silverman がナスカ 8 様式の特徴としてあげている要素の中で、明確にワルパ文化にその起源をたどることができるものは存在せず、彼女が幾何学文の 1 つとして挙げている階段文の起源も、本論での分析の結果、アヤクーチョ谷ではなく南海岸に求められることが判明している。また、円形の描画空間内に図像を描くことや、色落ちしやすい黒色顔料の使用も、ワルパ文化の土器には見られない特徴である。このように、Silverman が主張するようなワルパ文化の土器からナスカ文化の土器へと伝わっている要素の存在を、現時点で確認することはできない。

Silverman が指摘する超自然的な図像の変化に関しても、ワルパからの影響ではなく、ナスカにおける信仰の変化を反映していると解釈することが可能である。ナスカ地域最大の宗教センターと考えられているカワチ神殿は、ナスカ中期になると徐々に宗教センターとしての機能を失い、やがて墓所へと変化する［Silverman 1993:318］。後述するようにナスカ中期以降、ナスカ地域では次第に乾燥化が進んだ可能性がある［Reindel 2009; Mächtle and Eitel 2013; Schittek et al. 2015］。ナスカの土器には、動物と人間の両方の特徴を有するような超自然的存在が描かれたものが少なくないが、Proulx［2007:4］によれば、それらの超自然的な図像は、農作物の豊作をもたらす自然界の力を表現したものであり、ナスカの人々の信仰対象を表現したものであるという。カワチ神殿の機能の変化は、ナスカの人々の信仰の変化を反映しているという解釈ができ、乾燥化という自然環境の変化が長期的な農作物の不作状態をもたらしたのであれば、ナスカの人々の信仰対象や信仰心に変化が生じた可能性もある。ナスカ中期以降、ナスカの人々の信仰に変化が生じているのであれば、信仰と関わると考えられる土器の図像表現に変化が生じたとしても不思議はない。このようにナスカ文化の土器の変化をワルパ文化に由来する要素に起因すると考える Silverman の主張は、明確な根拠を欠いている。

では、Lidio Valdez［2003］の主張は妥当なものであろうか。彼は、土器に関する情報がナスカからワルパへと伝わったと考えており、この考え自体は、本論での土器の分析結果と矛盾しない。しかし、彼の考えも、確かな証拠に支えられているとは言いがたい。彼は、ワルパが主に土器に関する情報の受け手であることを認識した上で、ワルパの人々（アヤクーチョ谷国家）がナスカの人々を支配したと考えていた［Valdez 2003:26］。Valdez が、ワルパ文化とナスカ文化の土器における装飾要素の伝わり方の非対称性を指摘し、その背景に関する考察を行っている点は評価できる。しかしながら、彼が同時代と考えるナスカ 5 様式に対応する時期と中期ホライズン 1A との同時代性は、証明されているわけではない。また、ナスカの土器職人がアヤクーチョ谷の国家によってアヤクーチョ谷へと強制的に移住させられたという考えも、本人も認識しているように十分な考古学的証拠が存在するわけではない［Valdez 2003:26］。彼は、ナスカの土器製作技術のアヤクーチョ谷社会への導入を国家形成の結果としてとらえているが、現時点では、ワルパ様式やクルス・パタ様式の土器が製作・使用されていた時期に、アヤクーチョ谷内に国家が存在していたという証拠は乏しい［Jennings 2010:5］。むしろこの時期は、国家形成の途上にあったと考えられる。

このように、ワルパが南海岸へと進出した結果、両地域間の交流が活発化したという考えを支持する明確な証拠は存在しない。では反対に、南海岸からアヤクーチョ谷への人の移動がワルパとナスカの密接な交流をもたらしたと考えることは可能であろうか。先行研究では、前期中間期における南海岸からアヤクーチョ谷方面への人の移動に関してはほとんど議論されていない。しかしナスカ地域のパルパ市周辺における最近の調査成

果はその可能性を示している。そこで次に、パルパ市周辺での調査成果を概観する。

現在ナスカ地域のパルパ市周辺では、ドイツ人考古学者 Markus Reindel を中心とする調査隊が、地理学者や生物学者と共同で、気候変動とセトルメント・パターンの変化との関係について研究を進めている。セトルメント・パターンに関する調査を行ったのは Reindel 自身を中心とする考古学者達であった［Reindel 2009; Reindel y Isla 2013］。この調査では、グランデ川とインヘニオ川の合流地点から標高約 2000mのグランデ川、パルパ川、ビスカス川の上流域に至るまでの範囲が対象とされた［Reindel and Wagner 2009:13］。彼らの調査対象期間は過去 5000 年以上に及ぶが、本論に関連する期間に限定した彼らの調査成果は次の通りである。ナスカ前期（表 1）には、集落は河谷の縁に沿って連なるように存在していた。なかでもグランデ川、パルパ川、ビスカス川の合流地点に広がる広大な平野部には、中心的巨大建造物、計画的街区、そしてアドベを使用した建築によって特徴付けられる中心的集落が存在した（Reindel 2009:452; Reindel y Isla 2013:87-88）。しかし、ナスカ中期 （表 1）以降になるとこのような状況に変化が現れる。3 河川の合流点周辺の低地平野部に存在していた集落の多くが放棄され、大規模な集落は川のより上流にあたる河谷中央部付近に存在するようになる［Reindel y Isla 2013:88］。集落が各河谷の中央部、すなわち川の上流に移動する傾向は、ナスカ後期 （表 1）になるとさらに強まる［Reindel y Isla 2013:88］。中期ホライズン（表 1）になると、集落遺跡の数は極めて限られ、主にワリの特徴を示す墓が散発的に認められるだけになる［Reindel y Isla 2013:88-89］。

このようなセトルメント・パターンの変化について、調査者は環境の変化と関連づけて解釈している。河川の水の量が豊富な湿潤期には、農耕のための土地が得やすいグランデ川、パルパ川、ビスカス川の合流地点付近に広がる低地平野部に集落が存在したが、乾燥化が進み河川の水量が減少するにしたがい、農耕のための土地は得にくくなるが、より安定して水を入手できる川の上流部へと集落の立地が変化したと考えている［Reindel 2009:454-455］。乾燥化が進んだことは、地上絵を利用して水や豊穣と関連した儀礼がナスカ中期から後期にかけて活発化することにも表れているという［Reindel y Isla 2013:88］。グランデ川、パルパ川、ビスカス川の上流のその先にはアヤクーチョ谷が存在する。これら 3 河川の上流部からアヤクーチョ谷までは依然として 100km ほどの距離があるが、パルパ市周辺地域における川の下流部から上流部へという人の動きは、ナスカの人々のアヤクーチョ谷への接近としてとらえることができる。

Reindel らの解釈は、自然科学的な手法による研究成果とも矛盾しない。気候変動に関しては、パルパ市周辺の黄土の堆積状況に基づいた古環境に関する研究により、紀元前 800 年から紀元後 650 年頃にかけて比較的湿潤な気候が続き、紀元後 650 年から 770 年頃にかけて比較的乾燥した気候であった可能性が示されている（Mächtle and Eitel 2013）。また、パルパ市付近を流れるビスカス川上流に存在する泥炭地から採取された土壌中の花粉や化学元素の分析によれば、パルパ市周辺の環境は、前期中間期後期から乾燥化が進み、中期ホライズンには非常に乾燥していたと考えられること、および、この乾燥化に先立ち比較的短期の乾燥化が生じており、それがナスカ中期における川の下流域から中、上流域へという集落の位置の変化と関連している可能性を指摘している［Schittek et al. 2015］。さらに、人の移動に関しては、パルパ市周辺の低地および高地の遺跡から出土した人骨の DNA 分析に基づいた分析により、紀元後 668 年頃（中期ホライズン初期）までに低地から高地へ、紀元後 1153 年頃（後期中間期）までに高地から低地への人々の大規模な移住が存在した可能性が指摘されている［Fahren-Schmitz et al. 2014］。

このように、ナスカ地域のパルパ市周辺の調査データを総合すると、気候の変化に伴い前期中間期後期から中期ホライズンにかけて低地から高地への人々の移動が生じた可能性が高く、Reindel ら［Reindel 2009; Reindel y Isla 2003］が明らかにしたセトルメント・パターンの変化を考慮するならば、そのような人の移動はナスカ中期

に始まっていた可能性がある。ただし、ナスカ地域でのセトルメント・パターンの通時的変化は、地域全体で一様ではない［Silverman and Proulx 2002:112-123］。すでに述べたように、ナスカ地域北部のパルパ地域では、ナスカ中期以降、低地から河川の上流にあたる高地へと遺跡の立地が変化していた［Reindel 2009; Reindel y Isla 2013］。それに対し南部では、ナスカ中期になるとそれまでよりも上流部にも集落が出現する一方で、それまでに集落の存在しなかった各河川の中流域にも集落が出現する。ナスカ地域南部では、地表を流れていた河川の水は、中流域で一端伏流水となり地下に潜り、下流において再び地表に現れる。そのため南部の河川中流域は、地表にはほとんど水が流れていない乾燥した地域となっている［Schreiber and Lancho Rojas 2003:28-30］。ナスカ中期になりそのような地域に集落が出現するのは、この時期にこの地域に地下水路と取水口が建設され、伏流水の利用が可能になったためであると調査者は考えている［Schreiber and Lancho Rojas 1995:249］。そして南部では、その後もこれらの河川中流域において集落が存在し続ける［Schreiber and Lancho Rojas 1995:250-251］。このようにナスカ地域内部でも、北部と南部とではセトルメント・パターンの変化の仕方に違いが存在するので、ナスカ地域一帯の人の動きにおいてパルパ市周辺と同様の傾向が認められるのか否かは、今後検証する必要がある。

こうした点に注意する必要はあるものの、パルパ市周辺地域のセトルメント・パターンと気候変動に関する資料は、前期中間期から中期ホライズンへの移行期にナスカ地域の人々の間で低地から高地への移住が進んだ可能性を示している。すでに述べたように、パルパ市周辺を流れる 3 河川の上流をさらに山岳方面へと進んだ先にはアヤクーチョ谷が存在する。ナスカ地域からアヤクーチョ谷方面への人の移動があったとするならば、ワルパとナスカの交流の活発化はそのような人の動きをきっかけとするものであり、交流の舞台となったのは、ナスカの人々の移動先である山岳部であったのではないかというひとつの仮説が成り立つ。

ナスカの人々のアヤクーチョ谷への接近が、ワルパの土器の装飾や器形に認められるワルパとナスカの密接な交流をもたらしたとするこの考えは、ワルパ文化の土器にナスカ文化の要素が認められるようになるのは、ワルパの人々のナスカ地域への進出によるものであるという先行研究の考え方とは対立する。しかし、先行研究の考えが説得力を持つものではないことが判明した今、この仮説を検証する価値は十分にあるだろう。

７．おわりに

これまでワルパの遺跡の発掘資料に基づく、ワルパとナスカの関係の検討はほとんど行われていない。本論では、ワンカ・ハサ遺跡の一括土器をナスカ文化の土器と比較することによって、いつ、どのような交流が両者の間で生じていたのかを検討した。その結果、①ワルパとナスカの交流が活発化したのは、アヤクーチョ谷ではクルス・パタ様式の土器が、南海岸では、ナスカ 8 様式の土器が製作・使用されていた時期であると考えられる、②ワルパとナスカの間の土器に関する情報はナスカからワルパへと伝わっている。③ナスカからワルパへと土器に関する情報が伝わったのは、南海岸ではナスカ 8 様式の、アヤクーチョ谷ではクルス･パタ様式の土器が製作･使用されていた時期であり、それは前期中間期の後期もしくは末期であったと考えられる、という 3 点が明らかになった。さらに本論では、これまでの検討で明らかになったことと、ナスカ地域における近年の考古学による研究成果とを照らし合わせることにより、ワルパとナスカの交流の活発化は、ナスカの人々の高地への移動によって引き起こされた可能性があることを新たな仮説として提示した。

ナスカ文化の土器や遺跡の存在については、アヤクーチョ谷ではこれまで報告がなされていない。そのためワルパとナスカの人々の接触・交流は、アヤクーチョ谷と南海岸の中間地帯にあたる高地で生じていたのでは

ないかと予想されるものの、それを立証するための資料は極めて乏しい。今後は、高地におけるナスカ文化にも目を向け、ワルパとナスカの接触・交流がどこで生じていたのかを明らかにするための調査を行う必要がある。

さらに、ワルパとナスカの間にどのような関係が存在したのかを解明することも、今後の課題として残されている。先行研究では、ワルパとナスカの関係について、アヤクーチョ谷社会のナスカへの進出、あるいは前者による後者の支配が考えられてきた。しかし、このような考え方は、後のワリによるペルー山岳部及び海岸部への広範な拡大を意識したものであり、ワリの拡大の前兆となる動きをワルパに求めているように思われる。

まずは、どこで両者の接触・交流が生じていたのかを、ワルパとナスカに関係する遺跡の分布状況とそれらの遺跡で観察できる遺構や遺物の特徴から明らかにする必要がある。さらにワリの成立を視野に入れつつ、ワルパとナスカの間にどのような交流が存在したのか、そしてそのような交流によっていかなる変化がワルパに生じたのかを、ワルパとナスカの接触・交流に関わると考えられる遺跡の発掘調査を通じて解明する必要がある。

本論は、ワルパとナスカの交流について一つの結論を導き出したというよりも、今後立証すべき一つの仮説を提示したに過ぎない。しかしながら、ワルパ自体に関する研究が乏しく、ワルパとナスカの関係に関する実証的な研究もほとんど存在しない現状においては、まずは問題を明確化し、今後の研究の方向性を打ち出す必要があることも確かである。その意味において、ワルパとナスカの接触・交流が生じた地域として高地に目を向ける必要性を指摘した本論は、ワルパとナスカの関係についての研究、およびワリ国家の形成過程の研究に一定の貢献をなすものであると考える。本論で示した課題についてはすでに取り組みを始めており、その経過については別の機会に報告したい。

【謝辞】

本論のもとになった調査と分析は、共同調査員である Gudelia Machaca, Fredy Huamán, César Alvarez, Oscar Huamán, Marilú Martínes, Luis Angel Ricce の協力の下に行われた。調査地であるトリゴパンパ村の方々にも大変お世話になった。スペイン語要旨の執筆にあたっては、Jorge Olano および Fredy Huamán の各氏にチェックしていただいた。また、本論に対し匿名の 2 名の査読者より有益かつ詳細なコメントをいただいた。ここに記して感謝したい。なお、トリゴパンパ村周辺遺跡での発掘調査では高梨学術奨励基金からの助成を、本論の執筆では日本学術振興会の特別研究員奨励費の支援を受けたことを明記しておく。

註

（註 1）イカ川およびリオ・グランデ・デ・ナスカ川流域を中心とする、ナスカが栄えた地域全体を指すときには「南海岸」、リオ・グランデ・デ・ナスカ川流域のみを指す場合には「ナスカ地域」という呼称を使用する。

（註 2）単にナスカ、ワルパと記述する場合はそれぞれ、ナスカ社会、ワルパ社会を指す。また、ナスカとワルパを特徴付ける物質文化については、おのおのナスカ文化、ワルパ文化として記述する。

（註 3）ただし、ナスカ地域北部のパルパ市周辺で調査を行っている研究者は、ナスカが国家レベルの社会であったと主張している［Isla and Reindel 2006］。

（註 4）単にワリと記述する場合は、ワリ国家を指す。また、ワリ国家を特徴付ける物質文化について言及する場合にはワリ文化と記述する。

（註 5）厳密には土器と土製品は区別されるが、土器に対して土製品は少数であることと読みやすさを考慮し、本論では土製品を含め一括土器と呼んでいる。

（註 6）しかし、この Dawson による編年は詳細が公表されておらず、Dawson の土器分類方法や各様式の詳細は不明である。

（註 7）中期ホライズン初期の放射性炭素年代については、Isbell ら［Isbell et al. 1991:30］に基づいている。ナスカ 5 期の年代の根拠は示されていないが、おそらく Strong［1957:Table 4］がカワチ遺跡の墓 4 の試料から得た紀元後 526±90 という年代に基づいていると考えられる［cf. Silverman 1988:25］。

（註 8）Valdez は、ワリ国家の成立を中期ホライズン 1A に位置づけており［Valdez 2003:24］、クルス・パタ様式を中期ホライズン 1A の様式であると考えている［Valdez 2003:25］。したがって、彼は、ワリ国家とワルパ文化のクルス・パタ様式を同時代のものと考えている。たしかに中期ホライズン 1A の編年には問題があり［ノブロック 1991］、クルス・パタ様式が中期ホライズン 1A まで存在した可能性は否定できないが、ワリ国家とクルス・パタ様式を関連づける研究者は、Valdez のほかには存在しない。

（註 9）タンタ・オルホ遺跡からは前期中間期と後期中間期（1000AD-1500AD）、クルス・パタ遺跡からは中期ホライズンに属する土器が出土している。

（註 10）ペルー文化庁（現在のペルー文化省）の発掘許可番号は C/DGPA-0120-2002 である。

（註 11）出土した土器は、鉢やコップ形容器など飲食に用いるものや、飲食物の貯蔵や給仕に使用されたと考えられる大型壺や大型鉢、中型の注口付土器などから構成されていた。また、それらの中には、他のコンテクストではみられない珍しい装飾や器形を有するものが含まれていた。

（註 12）本文および表中の C は Contexto（スペイン語）の略である。

（註 13）放射状文とは、中心の圏点文を起点として太い線や細い線が放射状に描かれたものである。

（註 14）建築物を表現した土器は、アヤクーチョ谷では珍しいが、ワンカ・ハサ遺跡から出土した土器に類似した例として、現在ワリ遺跡博物館に展示されている 2 点の土器がある。ただし、ワリ遺跡博物館の土器は出土状況が不明である。

（註 15）この土器は彩色されていないが還元焼成で製作されており、器は焦げ茶色を呈している。

（註 16）これらの土器が見つかった地点の北側にはウチワサボテンが植えられていた。土地の所有者からサボテン撤去の許可が得られなかったため、これらの土器が出土した場所の北側は未発掘である。したがって残りの土器片がまだこの未発掘区域に埋まっている可能性がある。

（註 17）これらの土器は、単なる奉納品ではなく、饗宴で使用されたものであったのではないかと筆者は考えている。ワンカ・ハサ遺跡の一括土器と饗宴との関係についての詳細な議論は土井［2011:122-125］で行っているが、ワンカ・ハサ遺跡の一括土器に含まれている器形の多くは、Brewster-Wray［1990］や Cook［Cook and Glowacki 2003］らが、ワリ文化の土器の中で饗宴との関連性を指摘しているものに一致する。とくにペルー地域において、現在および過去においても饗宴に欠かせないチチャ［Allen 1988; アリアーガ 1984［1621］:422; Rowe 1946:292-293; Santa Cruz 1993［1613］:239; 細谷 1997; 友枝 1986］の貯蔵や消費に関わるものが多い。

（註 18）英語では angled goblet と呼ばれている。

（註 19）ただし、William Isbell［1997:209-210］が、祭祀建築としてのワカ・デル・ロロとワリ遺跡の建築の類似性を指摘しているように、一般的な住居ではなく祭祀建築としてのワカ・デル・ロロの円形建築の起源を南海岸に求めることができるのか否かは慎重に検討する必要がある。

引用文献

Allen, C. J.

1988 *The Hold Life Has.* Washington D. C.:Smithsonian Institution Press.

アリアーガ, パブロ・ホセ・デ（Arriaga, Pablo José de）

1984[1621] 「ピルーにおける偶像崇拝の根絶」（増田義郎訳）, 『大航海時代叢書第 II 期 16 ペルー王国史』pp. 363‐606. 岩波書店, 東京.

Benavides Calle, M.

1984 *Carácter del estado Wari.* Ayacucho:Universidad Nacional de San Cristóbal de Huamanga.

Beresford-Jones, D. G., O. Whaley, C. Alarcón Ledesma, and L. Cadwallader

2011 Two Millennia of Changes in Human Ecology:Archaeobotanical and Invertebrate Records from the Lower Ica valley, South Coast Peru. *Vegitation History and Archaebotany* 20(4):273-292.

Brewster-Wray, C.

1990 *Moraduchayuq:An Administrative Compound at the Site of Huari, Peru.* Unpublished Ph.D. Dissertation, State Universtiy of New York at Binghamton, New York.

Conlee, C. A.

2003 Local Elites and the Reformation of Late Intermediate Period Sociopolitical and Economic Organization in Nasca, Peru. *Latin American Antiquity* 14(1):47-65.

Cook, A. G. and M. Glowacki

2003 Pots, Politics, and Power:Huari Ceramic Assemblages and Imperial Administration. In *The Archaeology and Politics of Food and Feasting in Early States and Empires*, edited by T. L. Bray, pp. 173-202. Kluwer Academic/Plenum Publishers, New York.

土井正樹（Doi, M.）

2010 「ワリの祭祀建築の起源を求めて-ペルー、アヤクーチョ谷、ワンカ・ハサ遺跡の D 字形建築-」『古代アメリカ』13:103-114.

2011 『小集落から見た初期国家の形成過程ー先スペイン期中央アンデスのワリ国家を事例としてー』総合研究大学院大学文化科学研究科比較文化学専攻博士論文.

Eisleb, D.

1977 *Altperuanische Kulturen II:Nazca.* Museum für Völkerkunde, Berlin.

González Carré, E.

1982 *Historia prehispánica de Ayacucho.* Universidad Nacional de San Cristóbal de Huamanga, Ayacucho.

Harth-terré, E.

1965 *Análisis estético de la cerámica prehispánica de Nasca y una hipótesis de la factura de sus formas.* Tierra y Arte, Lima.

Hecht, N.

2009 Chapter 13, Of Layers and Sherds:A Context-Based Relative Chronology of the Nasca Style Pottery from Palpa. In *New Technologies for Archaeology:Multidisciplinary Investigations in Palpa and Nasca*, *Peru*, edited by M.

Reindel and G. A. Wagner, pp. 207-230. Springer, Heidelberg.

細谷広美（Hosoya, H.）

1997 『アンデスの宗教的世界』. 明石書店, 東京。.

Isbell, W. H.

1997 Reconstructing Huari:A Cultural Chronology for the Capital City. In *Emergence and Change in Early Urban Societies*, edited by L. Manzanilla, pp. 181-227. Plenum Press, New York.

2001 Reflexiones finales. *Boletín de Arqueología PUCP* 5:455-479.

Isbell, W. H. and A. G. Cook

2002 A New Perspective on Conchopata and the Andean Middle Horizon. In *Andean Archaeology III:Art, Landscape, and Society*, edited by H. Silverman and W. H. Isbell, pp. 249-305. Kluwer Academic/Plenum Publishers, New York.

Isbell, W. H., C. Brewster-Wray, and L. E. Spickard

1991 Architecture and Spatial Organization at Huari. In *Huari Administrative Structure:Prehistoric Monumental Architecture and State Government*, edited by W. H. Isbell and G. F. McEwan, pp. 19-53. Dumbarton Oaks Research and Library Collection, Washington, D. C.

Isla, J.

2001 Wari en Palpa y Nasca:Perspectivas desde el punto de vista funerario. *Boleín de Arqueología PUCP* 5:555-583.

Isla, J. and M. Reindel

2006 Brial Patterns and Sociopolitical Organization in Nasca 5 Society. In *Andean Archaeology III:North and South*, edited by W. H. Isbell and H. Silverman, pp. 374-400. Springer, New York.

Jennings, J.

2010 Beyond Wari Walls. In J. Jennings (Ed.), *Beyond Wari Walls:Regional Perspectives on Middle Horizon Peru* (pp. 1-18). Albuquerque:University of New Mexico Press.

Knobloch, P.

1983 *A Study of the Andean Huari Ceramics from the Early Intermediate Period to the Middle Horizon Epoch 1*. Unpublished Ph. D dissertation, State University of New York at Binghamton.

2000 Cronología del contacto y de encuentros cercanos de Wari. *Boletín de Arqueología PUCP* 4:69-87.

2005 Monkey Saw, Monkey Did:A Stylization Model for Correlating Nasca and Wari Chronology. *Andean Past* 7:111-134.

2013(online) An Early Intermediate Period Deposit of Huarpa Style Ceramics from the site of Huari, Department of Ayacucho, Perú. In *ArkeoAyacucho Perú*, edited by blog creator Alberto Tello, URL:https://ciasarkeoayacucho.files.wordpress.com/2013/02/an-early-intermediate-period-deposit-of-huarpa-style-ceramics-from-the-site-of-huari-department-of-ayacucho-perc3ba.pdf, 2015 年 1 月 19 日アクセス.

ノブロック, パトリシア（Knobloch, P.）

1991 「帝国の工芸家たち：ワリ帝国時代の美術」『古代アンデス美術』,（増田義郎, 島田泉 編）, pp. 107-123, 岩波書店.

Kroeber, A. L., and D. Collier

1998 *The Archaeology and Pottery of Nazca, Peru:Alfred L. Kroeber's 1926 Expedition.* edited by P. H. Carmichael with

an aferword by K. J. Schreiber. Altamira Press, Walnut Creek.

Leoni, J. B.

2009 *Archaological Investigations at Ñawinpukyo:Change and Continuity in an Early Intermeditate Period and Middle Horizon Community in Ayacucho, Peru.* Archaeopress, BAR International Series 1991, Oxford.

Lumbreras, L. G.

1959 Esquema arqueológico de la sierra central del Perú. *Revista del Museo Nacional de Lima,* 28:64-117.

1960 La cultura de Wari, Ayacucho. *Etnología y Arqueología* 1(1):130-227.

1974 *Las Fundaciones de Huamanga.* Nueva Educación, Lima.

Fehren-Schmitz, L., W. Haak, B. Mächtle, F. Masch, B. Llamas, E. Tomasto Cagigao, V. Sossna, K. Schittek, J. Isla, B. Eitel, and M. Reindel

2014 Climate Change Underlies Global Demographic, Genetic, and Cultural Transitions in Pre-Columbian Southern Peru. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 111(26):9443-9448.

Mächtle, B., and B. Eitel

2013 Fragile Landscapes, Fragile Civilizations- How Climate Determined Societies in the Pre-Columbian South Peruvian Andes. *Catena,* 103:62-73.

Menzel, D.

1964 Style and Time in the Middle Horizon. *Ñawpa Pacha,* 2:1-106.

1977 *The Archaeology of Ancient Peru and the Work of Max Uhle.* R. H. Lowie Museum of Anthropology, Berkeley.

Orefici, G.

2012 *Cahuachi:Capital teocrática Nasca.* Universidad San Martin de Porres, Lima.

Paulsen, A.

1983 Huaca del Loro Revisited:The Nasca-Huarpa Connection. In *Investigations of the Andean Past*, edited by D. H. Sandweiss, pp. 98-121. Latin American Studies Program, Cornell University, Ithaca.

Pérez Calderón, I.

2012 Asentamientos periféricos del centro urbano de Conchopata, Ayacucho. *Arqueología y Sociedad,* 25:143-168.

Proulx, D.

2006 *A Sourcebook of Nasca Ceramic Iconography:Reading a Culture Through its Art.* University of Iowa Press, Iowa City.

2007(online) Nasca Ceramic Iconography:An Overview. Reprinted from *The Studio Potter 29(1):37-43*, Modified September 2007, pp.1-15. URL:http://people.umass.edu/proulx/ online_pubs/Nasca_Ceramic_Iconography_Overview.pdf, 2014 年 8 月 27 日アクセス

Reindel, M.

2009 Chapter 25, Life at the Edge of Desert:Archaeological Reconstruction of the settlement history in the Valleys of Palpa, Peru. In *New Technologies for Archaeology:Multidisciplinary Investigations in Palpa and Nasca, Peru*, edited by M. Reindel and G. A. Wagner, pp. 439-461. Springer, Heidelberg.

Reindel, M., and J. Isla

2013 Cambio climático y patrones de asentamiento en la vertiente occidental de los Andes del sur del Perú. *Diálogo Andino* 41:83-99.

Reindel, M., and G. A. Wagner

2009 Chapter 1, Introduction-New Methods and Technologies of Natural Sciences for Archaeological Investigations in Nasca and Palpa, Peru. In *New Technologies for Archaeology:Multidisciplinary Investigations in Palpa and Nasca, Peru*, edited by M. Reindel and G. A. Wagner, pp. 1-13. Springer, Berlin.

Rowe, J. H.

1946 Inca Culture at the Time of the Spanish Conquest. In *Handbook of South American Indians, vol.2, The Andean Civilizations*, edited by J. H. Steward, pp. 183-330. Smithsonian Institution, Washington, D. C..

Rowe, J. H.

1962 Stages and Periods in Archaeological Interpretation. *Southern Journal of Anthropology,* 18(1):40-54.

坂井正人編（Sakai, M. [ed.]）

2008 『ナスカ地上絵の新展開：人工衛星画像と現地調査による』山形大学出版会, 山形.

Santa Cruz PachacutiYamqui, J.

1993[1613] *Relacion de antiguedades deste reyno del Piru/ estudio etnohistórico y lingüístico de Pierre Duviols y César Itier.* Institut Français d'Études Andines; Centro de Estudios Regionales Andinos Bartolomé de Las Casas, Cusco.

Sawyer, A. R.

1975 *Ancient Andean Arts in the Collections of the Krannert Art Museum.* Krannert Art Museum, Urbana.

Schittek, K., M. Forbriger, B. Mächtle, F. Schäbitz, V. Wennrich, M. Reindel, and B. Eitel

2015 Holocene Environmental Changes in the Highlands of the Southern Peruvian Andes (14° S) and Their Impact on Pre-Columbian Cultures. *Climate of the Past* 11:27-44.

Schreiber, K.

1988 On Revisiting Huaca del Loro:A Cautionary Note. *Andean Past* 2:69-79.

2001 Los Wari en su contexto local:Nasca y Sondondo. *Boletín de Arqueología PUCP* 4:425-447.

Schreiber, K. and J. Lancho Rojas

1995 The Puquios of Nasca. *Latin American Antiquity* 6(3):229-254.

2003 *Irrigation and Society in the Peruvian Desert:The Puquios of Nasca.* Lexington Books, Lanham.

Seler, E.

1961[1923] Die buntbemalten Gefäße von Nasca im sűdlichen Perú und die Hauptelemente ihrer Verzierung. *Gesammelte Abhandlungen zur Amerikanischen Sprach-und Altertumskunde* 4:169-338.

Silverman, H.

1988 Nasca 8:A reassessment of its chronological placement and cultural significance. *Multidisciplinary Studies in Andean Anthropology, Michigan Discussions in Anthropology* 8:23-32.

Silverman, H.

1993 *Cahuachi in the Ancient Nasca World.* University of Iowa Press, Iowa City.

Silverman, H., and D. A. Proulx

2002 *The Nasca.* Blackwell Publishers, Oxford.

Strong, W. D.

1957 *Paracas, Nazca, and Tiahuanacoid Cultural Relationships in South Coastal Peru.* Society for American Archaeology, Memoir 13, Salt Lake City.

友枝啓泰（Tomoeda, H.）

1986　『雄牛とコンドル：アンデス社会の儀礼と民話』岩波書店，東京.

Unkel, I., M. Reindel, H. Gorbahn, J. Isla Cuadrado, B. Kromer, and V. Sossna

2012　A Comparative Numerical Chronology for the Pre-Columbian Cultures of the Palpa Valleys, South Coast of Peru. *Journal of Archaeological Science* 39:2294-2303.

Valdez, L. M.

2003　Algunas apreciaciones acerca de la influencia Nasca en el valle de Ayacucho. *Revista Arqueológica Warpa* 4:22-26.

Vaughn, K. J.

2009　*The Ancient Andean Village.* The University of Arizona Press, Tucson.

Vaughn, K. J., J. W. Eerkens, C. Lipo, S. Sakai, and K. Schreiber

2014　It's about Time? Testing the Dawson Ceramic Seriation using Luminescence Dating, Southern Nasca Region, Peru. *Latin American Antiquity* 25(4):449-461.

Warpa y Nasca:

Una perspectiva de interacción interregional a partir de la cerámica de Huanca Qasa

Masaki Doi
（Sociedad Japonesa para promoción de la ciencia, Universidad de Yamangata）

Palabras claves: Período Intermedio Temprano, Horizonte Medio, Interacción interregional, cerámica, Warpa, Nasca, Huanca Qasa

La interacción entre Warpa y Nasca es un tema importante para entender la formación del estado Wari. Sin embargo, los estudios sobre la interacción entre Warpa y Nasca son escasos.

Excavaciones realizadas en el año 2002 en el sitio arqueológico de Huanca Qasa ubicado en el valle de Ayacucho, Sierra Sur-Central del Perú, han expuesto nuevas evidencias que permite observar la influencia estilística Nasca en la cerámica de Ayacucho. En la segunda ocupación constructiva se contextualiza sobre el piso una serie de vasijas fragmentadas, completas y semicompletas que probablemente habrían sido puestas encima del piso como ofrendas previo a la ceremonia de entierro de las estructuras. La mayor parte de las vasijas registradas presenta decoración que estilísticamente se vincula a la cultura Warpa del Período Intermedio Temprano.

Como resultado de la comparación entre dichas vasijas del Huanca Qasa y de la cultura Nasca indican los puntos en común en iconografía y la forma de las vasijas del estilo Cruz Pata y el estilo Nasca 8. Los investigadores de la cultura Nasca consideran el Nasca 8 un estilo del Horizonte Medio aunque los investigadores de la cultura Warpa considera el Nasca 8 como el Período Intermedio Temprano. Basando en la dirección de transmisión de iconografía y forma de vasijas, de la cultura Nasca a la cultura Warpa, es probable que la interacción estrecha entre Warpa y Nasca ocurrió en el Período Intermedio Temprano Tardío.

Acerca de origen de interacción estrecha entre Warpa y Nasca, ha ido considerando por antecedentes como intrusión Warpa a la zona de Nasca, basándose la posible influencia Warpa en la cerámica y arquitectura Nasca. Sin embargo, no se pudo reconocer los elementos claros de la cultura Warpa en la cerámica Nasca a través del análisis de este artículo. Hay otro que considera la influencia Nasca en la cerámica Warpa fue causado por la invasión y control por el estado Ayacuchano contra Nasca. No obstante, no hay evidencia que indica existencia de un estado en el valle de Ayacucho durante el Período de la cultura Warpa.

El estudio reciente alrededor de la ciudad de Palpa en la zona de Nasca señala una posibilidad de que hay movimiento poblacional de las tierras bajas de Nasca hacia las tierras altas para tener acceso al agua del río. Por ello la gente va ocupando las partes más altas de los ríos a medida que va secando, desde el Período Intermedio Temprano Medio hasta Horizonte Medio como sucede con el rio Palpa. Se toma el análisis basándose en datos interdisciplinarios. A juzgar por la relación geográfica entre el valle de Ayacucho y las partes más altas de los ríos en la ciudad de Palpa, se puede considerar tal movimiento de la masa de pobladores de Nasca en el acercamiento al valle de Ayacucho, a la zona donde habitaban los Warpas. Por lo tanto, tentativamente, se presenta una idea de que este movimiento de la población causaría la interacción

estrecha entre Warpa y Nasca, como una hipótesis nueva que demostrarla en el futuro.

原稿受領日　2015 年 5 月 30 日
原稿採択決定日　2015 年 10 月 1 日